

新潟県三条市

## 新屋大和田遺跡Ⅱ

主要地方道長岡栃尾巻線【新屋拡幅】地方特定道路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2  
0  
1  
5

新潟県三条市

あら や あお わ だ い せき  
**新屋大和田遺跡Ⅱ**

主要地方道長岡栃尾巻線【新屋拡幅】地方特定道路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 1 5

三条市教育委員会

## 例　　言

1 本書は主要地方道長岡桜尾巻線【新屋號幅】地方特定道路整備事業に伴い発掘調査した三条市新屋字平林 1347-4 から 1358-2 に所在する新屋大和田遺跡（遺跡台帳番号 243）の調査報告書である。

2 本発掘調査は三条市が新潟県三条地域振興局から依頼を受け遺跡発掘調査委託契約を締結し、三条市教育委員会（調査事務局：三条市民部生涯学習課）が主体となって実施した。

3 発掘調査支援業務を株式会社吉田建設三条営業所（以下、「吉田建設」とする）に委託した。

4 確認調査、本調査に係る作業期間は以下のとおりである。

確認調査 平成 17 年 10 月 18 日～平成 17 年 10 月 21 日

本発掘調査 平成 25 年 9 月 9 日～平成 25 年 10 月 25 日

整理作業 平成 25 年 10 月 28 日～平成 25 年 11 月 29 日

報告書作成 平成 25 年 12 月 2 日～平成 26 年 3 月 15 日

報告書印刷 平成 27 年 1 月 22 日～平成 27 年 3 月 23 日

5 本調査の出土遺物、図面及び写真などの記録類は、三条市市民部生涯学習課が保管、管理している。

6 遺物の注記記号は「13A0」として、その後に出土地点などを記入した。

7 本書で表記している座標は、測量法改正（平成 14 年）以前の日本測地系の数値を使用している。図中で示す方位は Bessel 横円体平面直角座標系原点の X 軸方向が「真北」となる。また標高については東京湾平均海水面（T-P）を使用している。

8 掖載遺物の番号は、本文、観察表、図面図版及び写真図版すべてで一致している。

9 第 VI 章以外の引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。

10 科学分析については、株式会社パレオ・ラボに委託して実施し、その成果品の報告文を「第 VI 章 自然科学分析」に掲載した。

11 本書の執筆は、高野昌文（三条市）、細井佳浩、瀧口泰孝（吉田建設）、藤根久、中村賢太郎（株式会社パレオ・ラボ）があたり、編集は高野が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

第 I 章・第 II 章・第 VII 章 3 高野昌文、第 III 章・第 V 章・第 VII 章 1 細井佳浩、第 IV 章・第 VII 章 2 瀧口泰孝、

第 VI 章 藤根久、中村賢太郎

12 遺構・遺物の各種図版に関しては、Adobe 社 Illustrator を用いて作成し、Adobe 社 InDesign を用いて編集した。図版の縮尺はそれぞれに記した。遺物写真については遺物図版と同じ縮尺である。

13 石器については、鈴木俊成氏（新潟県立歴史博物館）、高橋保雄氏（公益財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団）にご教示いただいた。

14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多くのご教示とご協力をいただいた。記して厚く御礼を申し上げる。（五十音順、敬称略）

佐藤 宗司 佐藤 信之 佐藤 雅一 白井 雅明 杉野 真司 鈴木 俊成 高橋 保雄

寺崎 裕助 長谷川道子 堀川 正美 松井 寛 丸橋 康文 吉田 雅子

新潟県教育庁文化行政課 新潟県立歴史博物館 公益財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

## 目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
A 過去の調査	2
B 確認調査	2
C 平成20年度本発掘調査	2
D 平成25年度本発掘調査	2
E 整理作業・報告書作成作業・報告書印刷	4
3 調査・整理体制	5
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 周辺の遺跡	6
A 縄文時代の遺跡	6
B 古代の遺跡	9
3 歴史的背景	9
第Ⅲ章 調査の概要	10
1 調査の方法	10
2 グリッドの設定	10
3 基本層序	10
第Ⅳ章 遺構	13
1 遺構の概要	13
2 記述の方法	14
3 遺構各説	14
A 土坑	14
B ピット	14
第Ⅴ章 遺物	17
1 遺物の概要と記述の方法	17
2 石器	17

第VI章	自然科学分析	18
1	はじめに	18
2	試料と方法	18
3	結果	18
4	考察	19
5	おわりに	20
第VII章	まとめ	23
1	遺物	23
2	遺構	23
3	遺跡	23
《要約》		25
《引用・参考文献》		26
《遺構観察表》		27
《遺物観察表》		29

### 挿図目次

第1図	新屋大和田遺跡確認調査トレンド 位置図	3
第2図	現地公開の様子	4
第3図	新屋大和田遺跡周辺の地形概念図	7
第4図	鹿熊川流域の集落と代表的な遺跡	7
第5図	新屋大和田遺跡と周辺の遺跡位置図	8
第6図	グリッド設定図	11
第7図	基本層序	12
第8図	遺構の平面形態と断面形態の分類	13
第9図	連続試料の重鉱物・軽鉱物組成、火山ガラスと その屈折率	21
第10図	主な試料中の火山ガラスの屈折率測定結果	21
第11図	テフラ粒子等の偏光顕微鏡写真	22
第12図	三条商業高等学校社会科クラブ考古班 採集による新屋大和田遺跡の調文土器	24

### 表目次

第1表	分析試料とその特徴	18
第2表	4φ箇残渣中の鉱物組成(個数)	18
第3表	4φ箇残渣中の鉱物組成(個数%)	19

## 図版目次

### [図面図版]

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 図版1 調査区全体図   | 図版7 遺構分割図(6)  |
| 図版2 遺構分割図(1) | 図版8 遺構個別図(1)  |
| 図版3 遺構分割図(2) | 図版9 遺構個別図(2)  |
| 図版4 遺構分割図(3) | 図版10 遺構個別図(3) |
| 図版5 遺構分割図(4) | 図版11 遺物実測図 石器 |
| 図版6 遺構分割図(5) |               |

### [写真図版]

- |                       |                                  |
|-----------------------|----------------------------------|
| 図版12 遺跡近景             | 図版17 遺構写真(1) 土坑・ビット              |
| 図版13 遺跡遠景・調査区俯瞰・基本層序  | 図版18 遺構写真(2) ビット・下層検出状況・<br>作業風景 |
| 図版14 調査前状況・遺跡の地形・基本層序 | 図版19 遺物写真 石器                     |
| 図版15 調査区全景・遺構完掘状況     |                                  |
| 図版16 遺構完掘状況           |                                  |

# 第Ⅰ章 序 説

## 1 調査に至る経緯

新屋大和田遺跡は三条市下田地区を流れ五十嵐川に合流する鹿熊川の河岸段丘上に立地する。鹿熊川の流域には新屋、落合や曲谷といった集落が広がっており一つの生活圏を形成している。その中浦から新屋方面を通る主要地方道長岡柄尾巻線で道路改築事業の計画があり、平成14年11月に新潟県教育庁文化行政課から下田村教育委員会宛に「国県関係土木工事状況調査について」照会があった。道路改築事業の付近には直木岡A遺跡（遺跡番号144）・直木岡B遺跡（遺跡番号218）・直木岡C遺跡（遺跡番号264）と新屋大和田遺跡（遺跡番号243）の範囲内、もしくは接していることを確認した。それを受け新潟県三条土木事務所と協議を行ない、用地買収終了後に確認調査をすることで合意した。その後、平成16年3月に用地測量を実施して、先に新屋側から用地買収を行ない、その後、直木岡A～C遺跡が所在する中浦側で用地買収をする予定であることを確認した。

下田村は、平成17年5月に三条市・栄町と合併して現在の三条市になった。その際に事務も三条市に引き継がれ、調査の調整等にあたるようになった。平成17年8月に新潟県三条土木事務所と工事予定と確認調査の実施について協議をして、平成17年9月28日付三土第244号で新潟県三条土木事務所長から新潟県教育委員会教育長宛「埋蔵文化財発掘の通知について」が提出され、平成17年10月4日付三教生第494号により三条市教育委員会教育長から進達された。それを受け新潟県教育委員会教育長から三条市教育委員会教育長宛に新屋大和田遺跡の確認調査を実施するように通知があり、三条市教育委員会で確認調査を実施することとした。

確認調査は平成17年10月18日から10月21日までの4日間行われ、用地買収が行われた新屋側の新屋大和田遺跡を含む約520mの範囲について行ない、縄文時代と平安時代の遺跡が良好な状況で所在することが明らかになった。そして、確認調査の結果を受け新潟県教育委員会、三条土木事務所、三条市教育委員会と協議の結果、新潟県教育委員会が定める基準により、発掘調査の保護措置が必要とされる部分について、工事着工前に記録保存のための発掘調査が必要であるとの結論に至った。

平成20年度にまでは新屋側の一部分に待避所を設置することになり、傾斜地や狭小地を除く170m<sup>2</sup>を対象として本発掘調査を実施した〔高野2012〕。

その後、新屋工区は中浦側から工事を進めることになり、工事の進捗状況にあわせ平成23年度に直木岡A遺跡の確認調査、平成25年度に中浦字水上山地区試掘調査を実施している。

平成25年度の新屋大和田遺跡の本調査は協議の結果、調査対象を工事内容から道路の拡幅される部分について実施することになり、平成25年6月3日付、三振地第205号で文化財保護法第94条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の通知について」文書が提出され、平成25年6月19日付三生第378号により三条市教育委員会教育長から進達された。平成25年7月22日付で新潟県と発掘調査委託契約を締結し、平成25年9月2日付、三生第556号で文化財保護法第99条第1項に基づき発掘調査着手の報告を新潟県教育委員会教育長宛に行い現地発掘調査を実施した。

## 2 調査経過

### A 過去の調査

新屋大和田遺跡は昭和48年10月に中島栄一氏により発見され、新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班の精力的な活動により『五十嵐川流域における先史遺跡』Vol. 2において縄文時代の所産と考えられる表探資料が報告されている〔新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班1980〕。また、古代の所産と考えられる須恵器片も表探されている。三条考古学研究会による踏査も行なわれ、その後、遺跡範囲が拡大されている。

### B 確認調査

平成17年度の確認調査は、10月18日から10月21日にかけて4日間、用地買収が終了した新屋側の約520mの範囲について合計17か所のトレントの調査を行なった。合計136m<sup>2</sup>について調査した結果、ほぼすべてのトレントにおいてピットや土坑などの遺構が良好に残存している状況を確認した。また、石器や土器などの遺物も発見されている。この確認調査の結果から平地部の遺跡が破壊される範囲について本調査が必要であるとの結論に至った。

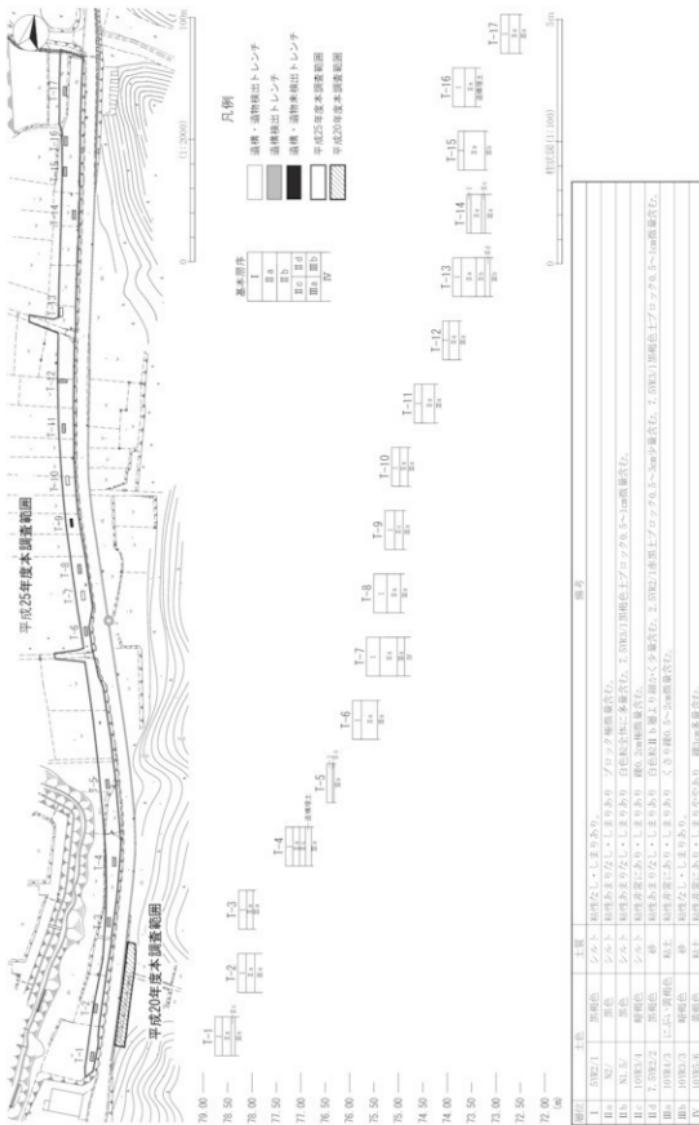
### C 平成20年度本発掘調査

平成20年度は9月16日から9月29日にかけて、本発掘調査対象地の新屋集落側（南側）での待避所設置に伴い、170m<sup>2</sup>の範囲について現地での本発掘調査を実施した。調査の結果、ピット67基、溝状遺構1条が発見され、遺構内からの遺物の出土はなかったが遺跡内及び調査地の表土等から縄文時代の所産と考えられる磨石、剝片、石錐、石礫、平安時代の所産である9世紀代の小泊産と考えられる須恵器の甕片が発見されている。

### D 平成25年度本発掘調査

調査期間：平成25年9月9日～平成25年10月25日

- 7月 7月22日 新潟県三条地域振興局と新屋大和田遺跡発掘調査の委託契約を締結し、準備作業を開始した。
- 8月 8月6日 株式会社吉田建設三条営業所と発掘調査支援業務委託契約を締結した。  
8月27日 新潟県三条地域振興局道路課桑原課長代理、現地立会い及び調査範囲確認を行なった。
- 9月 9月4日 現場北側3区から表土掘削作業を開始する。  
9月9日 作業員を入れ、現場3区北側から遺構調査を開始する。  
9月10日 2区北側の表土掘削を南側から開始した。  
9月12日 3区と2区北側の表土掘削を終了し、2区北側の遺構調査を開始した。1区の表土掘削を南から開始した。  
9月13日 1区の遺構調査を開始した。  
9月17日 前日までの台風により浸水した雨水の排水作業を主に行なった。



第1図 新屋大和田遺跡確認調査トレンチ位置図

## 2 調査経過

- 9月24日 3区及び2区北側の遺構調査がほぼ終了し、空中写真撮影前の場内清掃を行なった。
- 9月25日 場内清掃後3区及び2区北側をラジコンヘリによる空中写真撮影を行なった。
- 9月26日 1区の表土掘削を終了した。
- 10月 10月1日 2区南側の表土掘削を終了し、遺構調査を開始した。3区南側の重機による最終確認調査と記録等を実施した。
- 10月2日 3区北側の重機による最終確認調査と基本層序の記録等を実施した。
- 10月9日 2区南側の遺構調査を終了した。
- 10月15日 3区北側、2区南側、1区南側の基本層序記録位置において自然科学分析用の土壤サンプル採取を行なった。2区南側において10m間隔で下層確認トレンチ掘削を開始した。
- 10月18日 場内清掃後、2区南側、1区においてラジコンヘリによる空中写真撮影を行なった。
- 10月19日 地元への現地公開を実施した（第2図）。
- 10月21日 1区と2区の間の農道部分を1区拡張部とし、表土掘削後、遺構調査を行なった。2区南側で掘削した各トレンチの記録を行なった。
- 10月22日 1区南側の重機による最終確認調査と基本層序の記録等を実施した。
- 10月23日 1区拡張部の遺構調査終了後、高所作業車による写真撮影を行った。
- 10月25日 残っていた必要な測量・現地作業等が完了し、機材の撤収作業などを行い、現地でのすべての調査を終了した。

## E 整理作業・報告書作成作業・報告書印刷

調査期間：平成25年10月28日～平成26年3月15日

平成27年1月22日～平成27年3月23日

平成25年度は現場発掘調査終了後、10月28日から整理作業を開始した。遺物の水洗い、注記、現場写真整理、遺構実測図整理、遺物実測、遺構実測図トレース、遺物実測図トレース、遺構カード作成、図面校正などを行なった。その後、12月2日から報告書の作成に着手した。遺構・遺物図版作成、写真図版作成、報告書執筆などの作業を実施した。

平成26年度は7月に現地において必要箇所の工事立会いをして、その後、報告書編集作業、印刷製本を行ない、報告書を刊行し、すべての本発掘調査業務を終了した。



第2図 現地公開の様子

### 3 調査・整理体制

#### 平成17年度 確認調査

調査主体 三条市教育委員会 教育長 松永 悅男  
 調査指導 新潟県教育庁文化行政課  
 調査事務局 三条市教育委員会生涯学習課  
 管理 金子 正典 (生涯学習課長)  
 管理補佐 原 藤雄 (生涯学習課課長補佐)  
 指導 藤井 熊 (生涯学習課副理事)  
 田村 浩司 (生涯学習課担任主查)  
 調査担当 勝山 百合 (生涯学習課主事)

#### 平成25年度 現場発掘調査・整理作業・報告書作成作業

調査主体 三条市教育委員会 教育長 長谷川 正二  
 調査指導 新潟県教育庁文化行政課  
 調査事務局 三条市市民部生涯学習課  
 管理 金子 正典 (生涯学習課長)  
 管理補佐 金子 成郎 (生涯学習課課長補佐)  
 指導 田村 浩司 (生涯学習課文化財係長)  
 調査担当 高野 晶文 (生涯学習課主任)  
 調査員 高橋 陽一 (生涯学習課I類期限付任用職員)  
 発掘調査支援業務委託 株式会社吉田建設三条営業所

#### 平成26年度 報告書編集・印刷製本作業

調査主体 三条市教育委員会 教育長 長谷川 正二  
 調査指導 新潟県教育庁文化行政課  
 調査事務局 三条市市民部生涯学習課  
 管理 長谷川 健康 (生涯学習課長)  
 管理補佐 金子 成郎 (生涯学習課課長補佐)  
 指導 田村 浩司 (生涯学習課文化財係長)  
 調査担当 高野 晶文 (生涯学習課主任)

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

三条市は新潟県のはば中央部に位置し、信濃川右岸の新潟平野東南部に立地する。三条市を代表する河川である五十嵐川は、下田地区から三条市街地を貫流して新潟県を代表する大河である信濃川に注いでいる。三条市の地形は五十嵐川の上流部の河岸段丘の発達する山間部と、下流の平野部に分けることができ、新屋大和田遺跡は山間部側に立地している。また、山間部の背後には南は守門岳（標高1,538m）、北側には栗ヶ岳（1,293m）などの山々が連なる。

新屋大和田遺跡は標高約80mの五十嵐川の支流である鹿熊川の河岸段丘上に位置している。越後山脈に水源を持つ鹿熊川は鹿熊、新屋、落合、牛ヶ首、曲谷、鹿峰などの集落に沿って流れ、五十嵐川に合流している。鹿熊川は五十嵐川の北側を流れ、鹿峰から落合までは加茂や村松方向に抜ける街道筋にあたっている。また、新屋集落を通る主要地方道長岡柳尾巻線は安田、五泉方面から柳尾、魚沼方向に向かう交通の要所となっていて、現在でも交通量が多い道路である。

新屋大和田遺跡は山地の中に、鹿熊川によって形成された段丘の平坦面を利用して営まれた遺跡である。鹿熊川は周囲の山地に降った雨が小河川を通じ一気に流れ込み急激に増水するため、豪雨になると流域に大きな被害をもたらす。一方、新屋大和田遺跡の立地する台地上は鹿熊川の氾濫の影響を受けない平場が広がっているため、周辺にみられない好条件の立地である。

### 2 周辺の遺跡

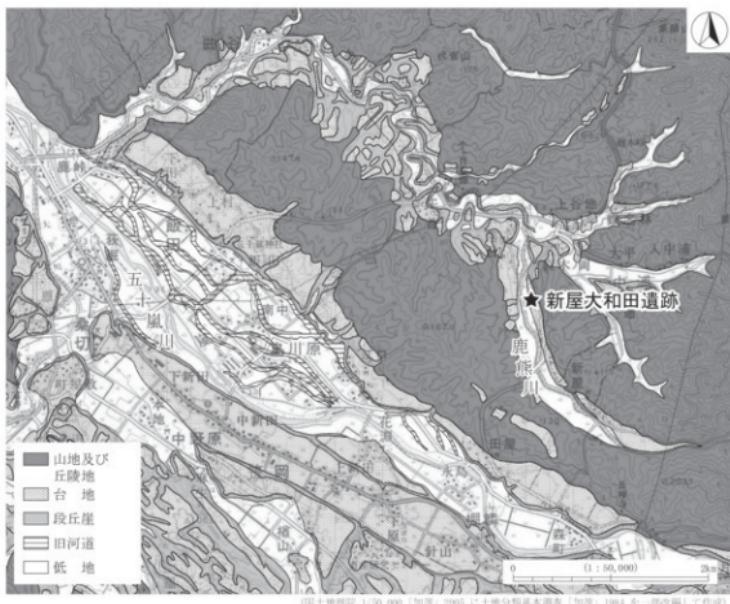
#### A 縄文時代の遺跡

三条市内には縄文時代の遺跡が多数に分布しており、特に下田地区の五十嵐川を中心として丘陵上に多く発見されている。ここでは、新屋大和田遺跡が所在する下田地区的遺跡を中心に概況を記していく。

鹿熊川沿いでは昭和51年に牛ヶ首地内の下山遺跡が調査され、縄文時代前期と考えられる土器片および石器が発見され、遺構としては土坑が発見されている。昭和54年に三条考古学研究会の佐藤雅一氏によって発見された曲谷E遺跡が、2001年に民間開発に伴い下田村教育委員会によって調査されている。調査の結果、縄文時代中期前葉の良好な資料が発見されている〔長澤ほか2001〕。この他、発掘調査はされていないが、表探資料や地形から鹿熊川流域では曲谷E遺跡から直径500mの範囲内に曲谷A遺跡や田ヶ沢A遺跡・田ヶ沢B遺跡など縄文時代中期の遺跡がある。また、牛ヶ首B遺跡、牛ヶ首D遺跡など鹿熊川流域でも縄文時代の遺跡は数多く確認されている。

五十嵐川の右岸の飯田地区では芹沢遺跡と八幡平遺跡が発掘されている〔中村・中島1975〕。縄文時代後期を中心とした土器が発見されたほか石錘などの石器が発見されており、古代の所産と考えられる須恵器や土師器も出土している。

八木ヶ鼻を望む五十嵐川と守門川の合流点近くからは、縄文時代中期の大集落である長野遺跡が調査され多様な形態の炉をもつ建物が多数調査され、大珠や火焔型土器といった縄文時代中期を代表する遺物が発見されてい

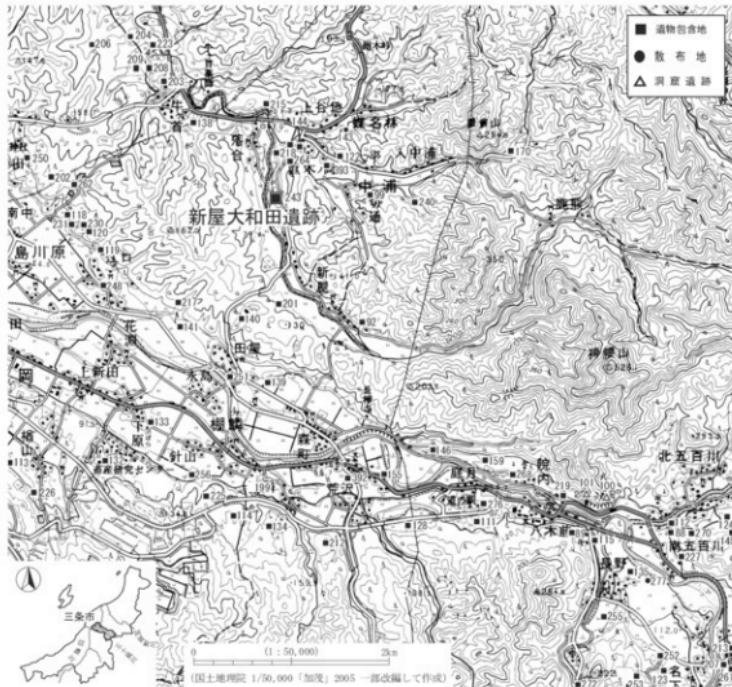


第3図 新屋大和田遺跡周辺の地形概念図



第4図 施熊川流域の集落と代表的な遺跡

## 2 周辺の遺跡



(国土地理院 1/50,000「加度」2005一部改編して作成)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
88	御前平A	旧石器・縄文	95	野原内	縄文・平安	253	中十地丸	縄文
89	御前平	旧石器・縄文	159	内	縄文・平安	255	長野日	縄文
92	御前	旧石器・縄文	170	人中瀬	平安	256	御前山	縄文
99	中瀬	平安	199	御前B	縄文	261	清光寺塚	縄文
100	人中瀬近傍2	縄文・佐草・平安	201	御前大瀬	縄文	262	御前御須原塚	縄文
101	人中瀬近傍1	縄文・佐草・平安	202	御前大瀬附	縄文	263	御前大瀬	縄文
111	下原	縄文	203	千ヶ瀬D	縄文	264	御前下原	縄文・平安
112	御前尾塚	縄文	204	千ヶ瀬B	縄文・平安	268	御前下原	縄文
113	鷲山	縄文	206	下山	縄文	270	北五百川上ノ山	縄文
114	御前A	縄文	207	北瀬B	縄文	272	松葉	縄文
115	七行塚	縄文	208	牛ヶ首A	縄文	277	若森	縄文
116	南中瀬塚	縄文・平安	209	牛ヶ首C	縄文	292	平	縄文・平安
120	御前A	旧石器・縄文	212	御前C	縄文	293	芦中	縄文
121	御前A	旧石器・縄文	213	御前A	縄文			
122	人中瀬	縄文・平安	215	上山地	縄文			
123	名下	旧石器・縄文	217	山原D	縄文			
124	人中瀬	縄文	218	直木原B	縄文			
128	北沢	旧石器・縄文	219	八木神社	縄文			
132	種子原	縄文	222	牛ヶ首E	縄文			
133	御前原	縄文	225	上山C	縄文			
134	御前	縄文	227	御前山B	縄文			
135	中瀬	縄文	230	上山A	縄文			
136	中山	縄文	231	上山B	縄文・平安			
139	山原C	縄文	240	人平有	平安			
140	山原D	縄文	243	新屋大和田	縄文・平安			
141	御前A	縄文	248	江口C	縄文			
142	御前林	縄文	250	熊田御崎	平安			
143	御前大和田	平安	251	御前	縄文			
145	御前野	縄文	252	下山御崎	縄文			
165	山原D	縄文						

第5図 新屋大和田遺跡と周辺の遺跡位置図

る〔家田1990〕。村道建設に伴い五十嵐川と駒出川の合流点付近に位置する成就院脇遺跡からは縄文時代後期の湧水地を囲む集落跡が発見されており、土坑や埋没谷から土器や石器などが発見されている〔勝山2004〕。また、同じく駒出川流域では圃場整備に伴い五百川遺跡が調査され、縄文時代中期中葉から後期初頭に渡る時期の土器が発見されている〔勝山1993a〕。同じく圃場整備に伴い駒出川をはさんだ対岸に立地する高野遺跡は払川と駒出川によって形成された段丘上の栗ヶ岳へ至るルート上に位置しており、分布は濃くないが、旧石器時代、縄文時代、平安時代、室町時代と多様な時代の土地の利用が確認されている〔勝山1993b〕。また、新屋から高城城跡が立地する衿腰山の尾根をはさんで反対側の森町地内、要害山の下に広がる段丘上に立地する舟内原遺跡は、縄文時代後期を中心とした時期の遺物が発見されている〔家田1987〕。

五十嵐川の左岸側の段丘上では藤平遺跡が発掘され、A地点からは亀甲状のプランをもつ掘立柱建物跡が広場を囲むように馬蹄形に配置された縄文時代晚期の集落跡が発掘されている〔家田1986〕。藤平遺跡では、縄文時代中期や弥生時代、古代の遺物も発見されており、絶好のロケーションの地が複数の時代に渡って利用される複合遺跡であることがわかる〔家田1983〕。芋ノ原遺跡は保育所建設に伴い旧石器時代・縄文時代・弥生時代・平安時代の遺物が発見されている〔勝山2006〕。縄文時代の所産としては、草創期の尖頭器と土器片が発見され、縄文時代中期前葉から中葉にかけての遺構、遺物が発見されている。

## B 古代の遺跡

古代の三条市内の遺跡分布は積極的な平野部の開発が進み冲積地での遺跡が増加する。下田地区では多くの遺跡が発見されている縄文時代に比べ、古代の遺跡はそれほど多く発見されていない。しかし、土器や須恵器などが表採されていて古代と考えられる遺跡は、鹿熊川流域を中心に分布している。鹿熊川流域に近い坂本には三千坊遺跡があり須恵器等が表採され〔田村1990〕、五十嵐川右岸の飯田地区では古代の遺跡が集中して発見されている。南中五輪峠遺跡では9世紀代の工房と考えられる堅穴建物と須恵器が発見されている。南中赤坂遺跡では鉄鋤やフイゴの羽口が出土しており鍛冶が行なわれていた〔金子・千葉1977〕。縄文時代が中心であるが芹沢遺跡、八幡平遺跡についても8世紀後半から9世紀代の遺物が発見されている〔中村・中島1975〕。この他、下田地区では升箕神社遺跡〔新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班1971〕や藤平遺跡〔家田1983〕、芋ノ原遺跡〔勝山2006〕など、五十嵐川の左岸の丘陵上からも古代の遺跡が発見されている。

## 3 歴史的背景

『下田村史』によれば、下田地区の五十嵐川の右岸の地域及び鹿熊川流域は天平年間（745～764年）に開基され、天禄年間（970年）に中興されたとされる三千坊遺跡が坂本の坂本から続く里山の中腹にあるとされている〔下田村史編集委員会1971〕。永らく伝承の城を出なかつた三千坊であるが、三条商業高等学校社会科クラブ考古班（以下、三商考古班と略す。）による精力的な調査があり〔新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班1982〕、その後調査概報がまとめられている〔田村1990〕。

中世には同じく飯田地区に五十嵐館跡があり、その伝承からも中世「五十嵐保」の拠点の一つが五十嵐川右岸の地にあったことが伺える〔金子1973〕。飯田地区、鹿熊川流域の古代の遺跡は、中世五十嵐保を形成する前身の集落であったと想定される。森町と新屋の間の衿腰から延びる尾根づたいにある大規模な山城である高城城跡は、国人領主として周辺を支配した下田長尾氏の本拠とされている〔下田村史編集委員会1971〕。

## 第III章 調査の概要

### 1 調査の方法

発掘調査は障害物件である電柱を避け、西側にある畠への進入路を確保するために調査区を3つに分けた。調査区の南側を1区、中央を2区、北側を3区とし、さらに調査区内にある電柱を境として各区を北側、南側に分けて調査を行なった（第6図）。確認調査の結果をふまえた上で、1区南側南端部ではⅢ層上面、3区ではⅡa層～VI層、その他をVII層上面まで掘削して遺構検出を行なった。また、1区南側や3区では遺構検出面に表していた黒色土の堆積状況を確認するため重機を用いて面的に掘り下げた。各区ではローム層中に旧石器時代の遺跡が存在する可能性を考慮し、部分的にトレンチを設定して重機や人力により掘削し、ローム層の堆積状況を確認した。ローム層はⅩ層まで掘り下げたが石器等は発見されなかつた。遺構の検出写真は調査区ごとにまとめて撮影し、その後個別の遺構の調査を行なった。遺構は種別に關係なく通し番号を付した。遺構は半蔵して写真撮影、断面を測量した後、完掘して写真撮影、平面図を作成した。土層観察は『新版標準土色帖』〔農林水産省水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所2006〕を用いて行った。遺構の検出写真・断面写真・完掘写真は35mmカラーリバーサルフィルムとデジタルカメラにて記録し、各調査区ごとの完掘写真は前述の2種類に加え、中判カラー・モノクロフィルムにて記録した。調査の進捗にあわせて3区と2区北側、2区南側と1区の2回に分けて遺構を完掘した後、全景写真をラジコンヘリにより上空から撮影した。また、1区と2区の間の拡張部分の遺構完掘後の全景写真を高所作業車から撮影した。

### 2 グリッドの設定（第6図）

平成25年度本調査範囲のグリッドは、道路沿いに細長く南北に延びる調査区が収まるように設定した。基点は調査対象範囲の南西に定めA1とし、10m四方の方眼を組んだ。A1の座標はBessel椭円体平面直角座標系原点（日本測地系）からX座標173,670.000、Y座標51,830.000で、X軸方向が「真北」となる（磁北は $7^{\circ}50'$ 西偏する）。なお、平成20年度調査範囲（基点となる1Aの座標はX座標173,695.000、Y座標51,934.000）はK・L4～6、K7・8グリッド内に収まる。

調査では大小2種類のグリッドを使用した。大グリッドは10m間隔で、東西軸が西から東に向って「A・B・C・D…」列、南北軸が南から北に向って「1・2・3・4…」列とした。よって南北に長い調査区は南東隅で「K3」、北西隅で「A42」となる。小グリッドは大グリッドを2m方眼に25分割した。小グリッドは南西隅を1とし、北東隅を25として算用数字で表し（第6図参照）、グリッドは「J3-22」のように呼称した。

### 3 基本層序（第7図）

新屋大和田遺跡は、遺跡の西側を南北に流れる鹿熊川により形成された河岸段丘上に位置する。本調査

範囲は、東から西へ傾斜する丘陵麓、河岸段丘基部の緩斜面上に立地し、遺跡の現況は畑地である。遺構確認面の標高は1区で78~75m、2区で75~73m、3区で73~72mで、詳細に見ると1区南側南半部は北から南へ緩やかに、1区南側北半部から1区北側は南から北へやや急に傾斜し、2区南側ではほぼ平坦となり、2区北側からやや起伏しながら北へ傾斜し、3区北側中央付近の谷筋で最も標高が低くなる。

基本層序は、1区南側、1区北側、2区南側、2区北側、3区南側、3区北側で記録したものを柱状図として第7図に、各層の概略を同図内の表に示した。なお、調査区が南北に長いため、同一層で土色・土質・含有物が異なるところもある。

I b層・I c層は表土で、I b層は現況の耕作土である。各調査区で遺構検出面近くまで堆積しており、1区南側中央では約20cm、3区南側南端で約70cm堆積する。II a層・II b層・II c層の堆積は3区北側で、II a層・II b層の堆積は2区南側と3区南側で、II a層のみの堆積は1区北側と2区北側で認められる。

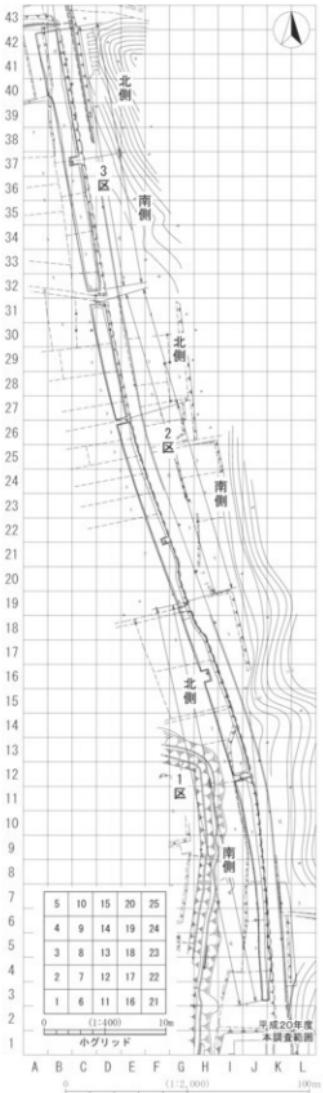
III層の堆積は1区南側と3区北側で認められ、1区南側では黄色、橙色を呈する軟質礫を多量に含む。IV層・V層・VI層の堆積は3区北側で認められる。VII層は遺構検出面で、1区南側南端部ではIII層、3区ではV層も遺構検出面となる。また、3区南側南端部付近ではIV層の下に暗褐色砂（第1図II d層相当）が薄く堆積しており、遺構検出面となる。

VIII層以下はローム層である。VIII層は砂質シルト、IX層は粘土、X層以下は礫を多く含む層である。

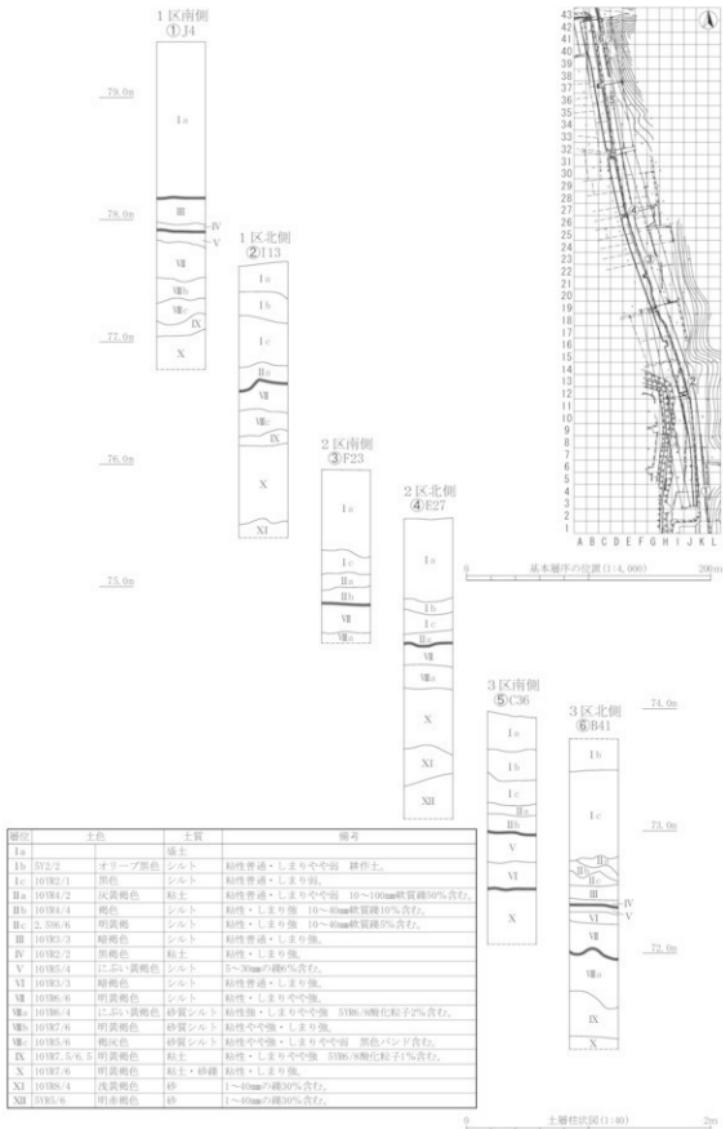
過去の調査の対応関係は平成17年度確認調査（第1図）のI層が本調査のI b層、II a層がI c層、III a層がII a層・II b層・III層、IV層がVII層にほぼ対応する。

また、平成20年度調査〔高野2012〕のI-1層・I-2層が本調査のI b層、II-1層・II-2層がI c層、III層がII a層・II b層、IV層がVII層にほぼ対応する。

なお、各調査区の基本層序記録位置において、土壤サンプル採取を行い、2区で自然科学分析（火山灰分析）を行っている（第VI章参照）。



第6図 グリッド設定図



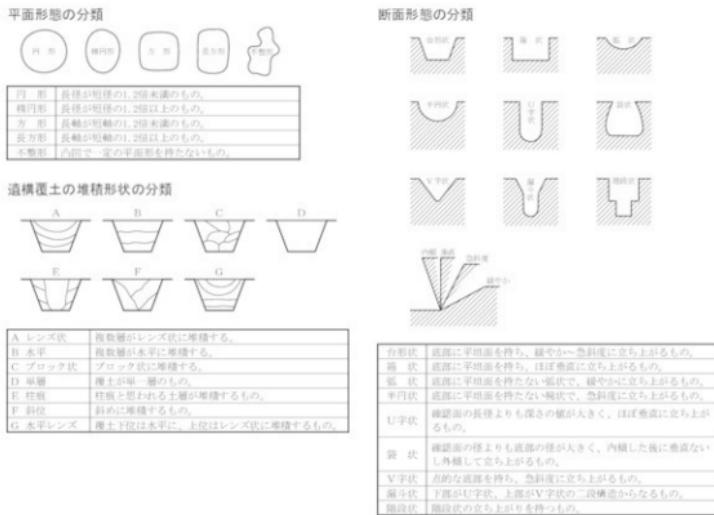
第7図 基本層序

## 第IV章 遺構

### 1 遺構の概要

今回の調査で検出した遺構は、土坑1基、ピット77基である。本調査区の1区南側の東方に近接する平成20年度調査では、調査面積170m<sup>2</sup>の範囲からピット67基、溝状遺構1条が検出されており、今回の調査範囲は調査面積に比して遺構数が少ないことがわかる。調査区分に見ると、1区では北から南へ大きく傾斜し、比高差3mを測る。調査区内は耕作による擾乱が著しかった。遺構はピット30基を検出した。2区は確認調査の結果や段丘上に平場が続くことから、調査当初は高い遺構密度と遺物の出土量が期待されたが、調査の結果、ピット14基の検出となった。3区は北側B40・41グリッド付近で谷地形を呈していた。この谷地形は現在鹿熊川へ向けて張り出す河岸段丘の北側の付け根に相当し、元来谷地形がここまで抉れていたことが判明した。遺構は土坑1基、ピット33基を検出した。

遺構の種別は掘り込みの規模や埋土の堆積状況などから判断した。遺構の平面規模は長径25cm以下の小規模なもののが過半数をしめる。なお、遺構内からは遺物は出土しなかった。



第8図 遺構の平面形態と断面形態の分類

## 2 記述の方法

今回の調査で検出した遺構のほとんどはピットである。前述のように小規模なものが大半であったため、比較的の遺存状況の良好なものを掲載するに留めた。個別記載のない遺構の詳細については遺構観察表を参照されたい。遺構種別の略号は、土坑を「SK」、ピットを「P」とした。遺構番号は、遺構種別に関係なく01から連番で付番した。遺構の平面形・断面形状については〔荒川ほか2004〕の分類を参考にした(第8図)。

なお、次節の3遺構各説のBピットは調査地の北から3区、2区、1区の順で記述する。

## 3 遺構各説

### A 土坑

#### SK06 (図版2・8・17)

B42-2・3グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形、断面形は台形状を呈する。規模は長径1.02m、短径0.75m、深さ0.12mを測る。埋土は単層であり、黒褐色粘質シルトを主体とする。

### B ピット

#### 1) 3区のピット

##### P02 (図版2・8)

A42-23グリッドに位置する。平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.37m、短径0.21m、深さ0.21mを測る。埋土は3層に分層でき、斜位に堆積する。

##### P07 (図版2・8・17)

B41-9グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.25m、短径0.23m、深さ0.14mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

##### P08 (図版2・8)

B41-4・5グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.30m、短径0.27m、深さ0.08mを測る。埋土は2層に分層でき、柱痕状に堆積する。

##### P10 (図版2・8)

A42-24・B42-4グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.40m、短径0.35m、深さ0.10mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

##### P12 (図版2・8・17)

B39-12グリッドに位置する。平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.28m、短径0.19m、深さ0.10mを測る。埋土は2層に分層でき、水平状に堆積する。

##### P20 (図版2・8)

B38-18グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.30m、短径

0.25m、深さ0.19mを測る。埋土は単層である。

**P23** (図版2・8)

C37-7グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径0.23m、短径0.17m、深さ0.17mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P24** (図版2・8・17)

B37-23グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径0.28m、短径0.25m、深さ0.13mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

## 2) 2区のピット

**P38** (図版3・9)

D27-20グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径0.23m、短径0.16m、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分層でき、柱痕状に堆積する。

**P39** (図版3・9・17)

D27-20グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径0.21m、短径0.19m、深さ0.14mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P40** (図版3・9)

D27-19グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はV字状を呈する。規模は長径0.38m、短径0.30m、深さ0.16mを測る。埋土は単層であり、黒褐色砂質土を主体とする。

**P81** (図版4・9)

G20-4グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径0.27m、短径0.23m、深さ0.14mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P82** (図版4・9・17)

G20-5グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径0.21m、短径0.18m、深さ0.10mを測る。埋土は1・2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P83** (図版4・9・17)

F22-22グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径0.23m、短径0.21m、深さ0.10mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P84** (図版4・9)

E26-5グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.18m、短径0.17m、深さ0.11mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

**P85** (図版4・9)

F22-13グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は半円状を呈する。規模は長径0.22m、短径0.21m、深さ0.18mを測る。埋土は2層に分層できる。

**P86** (図版4・9)

F22-7グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.24m、短径0.24m、深さ0.09mを測る。埋土は2層に分層でき、水平に堆積する。

3) 1区のピット

P59 (図版6・10)

I 12-19グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径0.25m、短径0.21m、深さ0.10mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

P60 (図版5・10・18)

H15-19グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形はV字状を呈する。規模は長径0.27m、短径0.25m、深さ0.18mを測る。埋土は2層に分層でき、柱痕状に堆積する。

P62 (図版5・10・18)

I 15-3グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はV字状を呈する。規模は長径0.23m、短径0.22m、深さ0.17mを測る。埋土は柱痕状に堆積する。

P65 (図版5・10)

I 15-25グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径0.20m、短径0.18m、深さ0.18mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

P67 (図版5・10)

I 15-25グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径0.18m、短径0.16m、深さ0.22mを測る。埋土は単層である。

P69 (図版5・10・18)

G 18-25グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径0.25m、短径0.22m、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分層でき、柱痕状に堆積する。

P41 (図版7・10)

J 3-22グリッドに位置する。1区南側の南西隅で検出した遺構で調査区外へ延びる。北側は搅乱を受けている。平面形は梢円形を呈すると思われる。断面形は台形状を呈する。規模は長径0.36m以上、短径0.28m以上、深さ0.29mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

P45 (図版7・10)

J 4-21グリッドに位置する。平面形は不整円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径0.19m、短径0.18m、深さ0.14mを測る。埋土は2層に分層でき、レンズ状に堆積する。

P52 (図版6・10・18)

J 7-19グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径0.28m、短径0.28m、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分層でき、柱痕状に堆積する。

# 第V章 遺物

## 1 遺物の概要と記述の方法

今回の調査で発見した遺物は石器のみで、合計12点である。内訳は籠状石器2点、打製石斧1点、不定形石器2点、剝片7点である。遺構中からの発見ではなく、3点は表土1層中から出土し、9点は1区と2区の間を通る農道部分やその周辺で表面採集したものである（遺物観察表参照）。

本遺跡発見の石器の石材は在地系の頁岩や流紋岩で占められる。石質は粒子の密度がやや緻密で、色調は灰褐色を呈するものが比較的多い。

本章の石器の記述については器種ごとに概要を述べ、個々の法量等については主に遺物観察表によるところとした。また、図版に未掲載のものも含む全点を遺物観察表に提示した。なお、不定形石器の分類、觀察項目、部位名称、計測位置等は『清水上遺跡II』〔鈴木・高橋1996〕に準拠した。

## 2 石器 (図版11・19)

1・2は籠状石器で、いずれも大形の剝片を素材として両面調整で刃部と基部を作出した石器である。いずれも刃部にかけて幅広になる楔形を呈し、長さ6.9～7.4cmに収まる。1は基部、刃部とも裏面のち正面からの両面加工で、いずれも大小の3段階の割離で成形している。割離面は器体の内側に及ぶ平坦な割離である。側縁部の稜は左側が直線的のに対しても右側がやや波状を呈する。敲打によるつぶれは見られない。刃部は裏面側の加工が入念で、両刃状に仕上げている。また、刃部縁辺は比較的波状で、刃部ラインは平坦状である。2は両側縁とも波状で、敲打によるつぶれは見られない。刃部は正面側の加工が入念で、片刃状に仕上げている。また、刃部縁辺は比較的直線的、刃部ラインは外溝状で、抉入部に使用痕が認められる。なお、1・2とも基部に摩滅の痕跡は認められない。

3は打製石斧で、基部側は折損している。大形の剝片を素材とし、大小の3段階の両面調整により成形している。基部形状は欠損により不明瞭であるが、基部幅と刃部幅がほぼ同じ短冊形と思われる。側縁部の稜は両側縁とも波状で、敲打痕は認められないため、籠状石器の加工に類似する。刃部は素材面を生かして概ね片面調整で、片刃状に仕上げている。また、刃部縁辺は比較的直線的、刃部ラインは外溝状である。使用痕は、刃部に磨痕が認められ、一部微細割離を伴う箇所もある。

4・5は剝片を素材として調整割離により作出した石器で、素材剝片には大形と小形の2種類が認められる。4は横長の剝片を素材とする。打面は欠損により不明瞭で、作業面は主要割離面と平行する。素材端部左側部分を正面からの急角度な片面調整により直線的に仕上げている。刃部は欠損しているが外溝状と考えられる。5は縦長の剝片を素材とする。打面から作業面右側縁にかけて原石面が認められる。打面形状は凸状を呈する。左側縁を裏面からの片面調整により直線的に仕上げている。両側縁下部は使用痕が認められ確認している。なお、正面下部にタール状の付着物が認められるが、現代に付着した可能性もある。

6は端部に平坦面や礫面を持つことから両設打面の剝片と考えられるが、上部が折損していることにより主要な打面は不明である。

# 第VI章 自然科学分析

## 1 はじめに

新屋大和田遺跡は、新潟県三条市新屋地区に所在する遺跡である。調査では、黒色土壌層、黄褐色ローム層が検出され、基本土層 Ic 層～VIIa 層に区分された。ここでは、これら基本土層についてテフラ分析を行い、テフラ層序を検討した。

## 2 試料と方法

分析試料は、2 区基本層序となる南側東壁 (F23-10) の連続採取試料20点である（第1表）。各試料は、5 cm 間隔で交互に連続採取した試料である

(第9図)。各試料は、以下の方法で処理した。

(1) 濃重で35g程度を秤量した後、3 φ (0.125mm)、4 φ (0.063mm) の2枚の篩を重ね、湿式篩分けをした。(2) 4 φ 篩残渣について、重液 (テトラブロモエタン、比重2.96) を用いて重鉱物と軽鉱物に分離した。(3) 軽鉱物は、水浸の簡

分析No.	位置	層位	試料No.	位置
1	Ic	1	1	黒色 (10901, 7, 7) 下層
2		2	2	黒色 (10902, 1, 7) 上層
3		3	3	黒色 (10902, 1, 7) 上層
4		4	4	黒色 (10902, 1, 7) 上層
5		5	5	黄褐色 (10902, 2) 上層
6	IIa	6	6	黄褐色 (10903, 2) 上層
7		7-1	7-1	黄褐色 (10903, 2) 上層
8		8	8	黄褐色 (10903, 2) 上層
9	IIc 2区南側東壁 (F23-10)	9	9	褐褐色 (10904, 4) 秋林上
10		10	10	褐褐色 (10904, 4) 秋林上
11		11	11	褐褐色 (10904, 4) 秋林上
12		12	12	オーブル褐色 (2, 014, 6) 砂質粘土上
13		13	13	に赤い褐色 (30944, 3) 秋林上
14	VII	14	14	黄褐色 (2, 015, 6) 砂質粘土上
15		15	15	褐褐色 (10904, 4) 秋林上
16		16	16	褐褐色 (10905, 6) 秋林上
17		17	17	オーブル褐色 (2, 014, 6) 秋林上
18		18	18	オーブル褐色 (2, 014, 6) 秋林上 (マングン粘土多い)
19	VIII	19	19	オーブル褐色 (2, 015, 4) 秋林上 (マングン粘土多い)
20		20	20	黄褐色 (2, 015, 4) 秋林上 (マングン粘土多い)

易プレパラートを作製し、軽鉱物組成と

第1表 分析試料とその特徴

火山ガラスの形態分類を行った。火山ガラスの形態は、町田・新井（2003）の分類基準に従って、バブル型平板状 (b1) 、バブル型Y字状 (b2) 、軽石型纖維状 (p1) 、軽石型スponジ状 (p2) 、急冷破碎型フレーク状 (c1) 、急冷破碎型塊状 (c2) に分類した。(4) 重鉱物は、封入剤カナダバルサムを用いてプレパラートを作製し、斜方輝石 (Cpx) 、斜方輝石 (Opx) 、角閃石 (Hs) 、磁鐵鉱 (Mag) 、ジルコ

分類No.	高さ (cm) (φ10 mm)	不明 (φ10 mm)	バブル (泡) 型		斜方型		急冷破碎型		ダラズ (el)	厚物部 (el)	合計	斜方輝石 (Opx) (%)	斜方輝石 (Cpx) (%)	角閃石 (Hs) (%)	ジルコ (Mag) (%)	重鉱物 の合計 (%)		
			平板状 (b1)	Y字状 (b2)	纖維状 (p1)	スponジ状 (p2)	フレーク状 (c1)	塊状 (c2)										
1	8	120	59	1	31	12	2	31	21	208	33	20	34	36	90	219		
2	17	150	59	1	41	2	1	2	41	17	216	40	9	21	20	69	209	
3	24	115	59	1	41	4	1	1	41	22	19	2	2	20	69	225		
4	8	128	72	61	21	2	2	31	18	226	19	3	29	3	44	119	215	
5	18	112	69	1	31	4	24	4	51	40	211	40	12	49	43	61	200	
6	15	123	37	1	41	4	14	4	10	37	212	41	4	52	3	54	47	201
7	11	122	31	1	41	25	7	11	31	215	87	6	43	9	52	45	206	
8	14	113	41	1	21	8	25	6	6	47	215	36	6	72	44	60	221	
9	14	93	52	2	81	5	35	8	8	66	225	54	7	37	2	64	48	212
10	12	125	52	1	81	1	20	2	41	50	213	63	5	50	36	59	213	
11	10	89	48	1	6	11	41	6	6	21	211	43	4	55	81	31	214	
12	20	80	59	1	71	6	26	9	10	59	218	40	5	55	1	103	30	229
13	2	99	60	1	51	4	38	9	12	60	229	42	2	55	2	94	12	207
14	12	85	63	1	71	6	30	11	12	67	227	38	2	86	53	31	210	
15	8	76	87	1	41	3	18	12	6	43	210	26	3	67	44	31	207	
16	14	102	44	2	91	4	21	10	15	60	220	45	5	73	77	12	212	
17	13	97	56	1	71	5	29	6	19	57	223	31	2	60	67	18	178	
18	6	79	60	3	81	6	37	11	21	23	224	42	2	70	72	18	203	
19	6	78	69	3	41	6	21	13	10	38	203	30	2	9	6	10	201	
20	9	92	27	8	71	5	22	8	21	69	202	15	1	20	11	161	208	

第2表 4 φ 脳残渣中の鉱物組成 (個数)

分類番号	C型 (kg)	英石 (F1)	重石 (0pq)	バブル(泡)型		軽石型		急冷碎型		ガラス 合計	軽鉱物 の合計	斜方輝石 (Opx) (%)	單斜輝石 (Cpx) (%)	角閃石 (Hb) (%)	シリカ (Z)	鉄鉱石 (Mg) (%)	不明 (Opx) (%)	重鉱物 の合計	
				平版状 (p1)	下伏状 (p2)	纖維状 (p1)	スボンジ状 (p2)	ブリーフ状 (c1)	塊状 (c2)										
1	3.8	37.7	28.4	0.5	1.4	0.0	5.8	1.0	1.4	10.1	100.0	15.1	9.1	18.8	0.0	16.4	43.8	100.0	
2	7.9	69.4	14.8	0.0	0.5	0.0	4.2	1.4	1.9	7.9	100.0	19.2	4.2	16.1	0.0	16.3	48.1	100.0	
3	2.0	36.7	28.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0	100.0	17.8	1.4	14.8	0.0	1.4	28.5	100.0	
4	4.5	56.6	31.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.5	100.0	13.8	0.0	13.8	0.0	0.0	54.5	100.0	
5	8.5	53.1	19.0	0.5	1.4	1.9	11.4	1.9	2.4	19.4	100.0	19.2	5.8	25.6	0.0	20.7	30.8	100.0	
6	7.1	58.0	17.5	0.5	1.9	1.9	6.6	1.9	4.7	17.5	100.0	20.4	2.0	25.9	1.5	26.9	23.4	100.0	
7	5.1	56.7	14.4	0.0	1.9	1.9	11.6	3.3	5.1	23.7	100.0	27.7	2.9	20.9	1.5	25.2	11.8	100.0	
8	6.5	52.6	18.1	0.5	0.9	3.7	11.6	2.8	2.3	21.9	100.0	16.3	2.7	32.6	0.0	19.9	28.5	100.0	
9	6.2	41.3	25.1	0.0	3.6	2.2	18.6	3.6	3.6	29.5	100.0	25.5	3.3	17.5	0.9	30.2	22.6	100.0	
10	5.6	45.5	24.4	0.5	3.8	0.9	16.4	0.9	1.9	24.4	100.0	31.2	2.3	25.3	0.0	27.0	16.2	100.0	
11	3.0	39.9	26.0	0.0	2.8	0.5	1.4	8.1	2.8	24.4	100.0	20.7	0.0	21.3	0.0	0.0	19.7	100.0	
12	9.2	56.1	11.1	0.0	0.0	0.0	11.9	4.1	5.1	21.1	100.0	17.3	0.0	24.0	0.4	0.0	44.6	100.0	
13	9.9	45.2	26.1	0.4	2.2	1.7	16.6	3.5	5.2	29.7	100.0	20.3	1.0	26.6	1.0	45.4	5.8	100.0	
14	5.3	37.4	27.8	0.4	3.1	2.6	13.2	4.8	5.3	29.5	100.0	18.1	1.0	41.0	0.0	25.2	14.8	100.0	
15	2.4	35.7	41.4	0.5	1.9	1.4	8.6	5.7	2.4	20.5	100.0	12.6	1.4	27.5	0.0	40.6	17.9	100.0	
16	6.4	46.4	26.0	0.0	0.9	1.8	9.1	4.5	6.8	27.3	100.0	21.2	2.4	34.4	0.0	36.3	5.7	100.0	
17	5.8	45.5	25.1	0.0	0.0	3.1	2.2	9.0	2.7	8.0	25.6	100.0	17.4	1.1	35.7	0.0	37.6	10.1	100.0
18	2.7	35.3	29.0	1.8	3.6	2.7	16.5	2.2	6.2	33.0	100.0	20.7	1.0	34.5	0.0	37.9	5.9	100.0	
19	2.0	36.0	34.0	1.0	2.0	1.0	10.8	6.4	4.9	25.0	100.0	9.6	0.0	8.5	0.0	3.0	9.2	100.0	
20	3.5	48.0	13.4	4.0	1.0	1.0	10.9	4.0	10.4	34.1	100.0	7.2	0.0	9.6	0.0	0.0	3.1	77.4	100.0

第3表 4φ篩残渣中の鉱物組成(個数%)

ン(Zi)、不明(0pq)を同定・計数した。(5)主な試料中の4φ篩残渣中の火山ガラスは、横山ほか(1986)に従って、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率測定を行った。

### 3 結 果

以下に、各地点の試料について、軽鉱物組成、重鉱物組成、火山ガラスの屈折率測定結果について述べる。

4φ篩残渣中の軽鉱物では、分析No. 1～No. 5において火山ガラスは10%前後であるが、分析No. 6～No. 20において約17.5～34.2%と比較的多く含まれていた。火山ガラスを多く含む試料は、No. 11が34.1%、No. 18が33.0%、No. 20が34.2%であり、特定の層準で多くはない(表3)。また、全体的にバブル型ガラスが少なく、軽石型スボンジ状ガラス(p2)や急冷破碎型ガラス(c1およびc2)が多い(第2表、第9図)。多くの火山ガラスは、表面に無数の凹みが見られた(第11図3～5、8、9)。なお、軽鉱物試料の一部には、放散虫化石や骨針化石が含まれていた(分析No. 5やNo. 7など; 第11図15)。

4φ篩残渣中の重鉱物では、分析No. 1～No. 4において斜方輝石(Opx)や角閃石(Hb)が多く、次いで斜方輝石(Cpx)も比較的多く検出された。しかし、分析No. 5～No. 18においては斜方輝石(Cpx)が非常に少ない。また、分析No. 19とNo. 20では輝石や角閃石が少なく、不透明な不明粒子が多い(第2表)。

火山ガラスの屈折率測定では、主に軽石型の火山ガラスを測定し、No. 1が1.4952～1.4994であるが、No. 7～No. 20はいずれの試料も1.500よりやや低い位置の狭い範囲に集中する(第9図、第10図)。

### 4 考 察

新屋大和田遺跡で採取した連続試料20点について鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定を行った。

その結果、分析No. 6～No. 20において約17.5～34.2%と比較的多く含まれていた。ただし、特定の層準で多くはない。全体的に、軽石型スボンジ状ガラス(p2)や急冷破碎型ガラス(c1およびc2)が多く、いずれの試料も1.500よりやや低い位置の狭い範囲に集中する。これら火山ガラスは、形態的特徴と屈折率測定結果から、浅間草津テフラ(As-K)の可能性が高い。

浅間草津テフラ(As-K)は、15,000～16,500年前に浅間火山において降下軽石や火砕流堆積物として噴出

したテフラである。このテフラは北（東）～200km以上に分布する。主な重鉱物は斜方輝石と单斜輝石であり、軽石型火山ガラスの屈折率（n）は、1.501～1.503、斜方輝石の屈折率（γ）が1.707～1.712である〔町田・新井2003〕。

新屋大和田遺跡で採取した連続試料では、特定の層準を示さないが、黄褐色ローム層中の軽石型ガラスは、浅間草津テフラ（As-K）の可能性が高い。ただし、この浅間草津テフラ（As-K）の重鉱物は、斜方輝石と单斜輝石からなるが、連続試料中には角閃石が多く含まれていた。放散虫化石や骨針化石が含まれていたことから、基盤層（新第三紀後期中新世～第四紀前期更新世の海成層：小林ほか2002）からの誘導化石と考えられ、これら基盤層中のテフラ起源も含めた角閃石が混入したこととも考えられる。ただし、軽石型ガラスの屈折率が、1.500よりやや低い位置の狭い範囲に集中することから、基盤層由来のテフラの混入の可能性は低いと考える。

なお、分析No. 1～No. 5のガラスは、屈折率の低いガラスが測定されていることから、他起源のテフラの可能性がある。

市内北五百川字高野地内に所在する高野遺跡および五百川遺跡においても、鉱物学的特徴あるいは屈折率の特性を示す同テフラが検出されている〔古環境研究所2013〕。

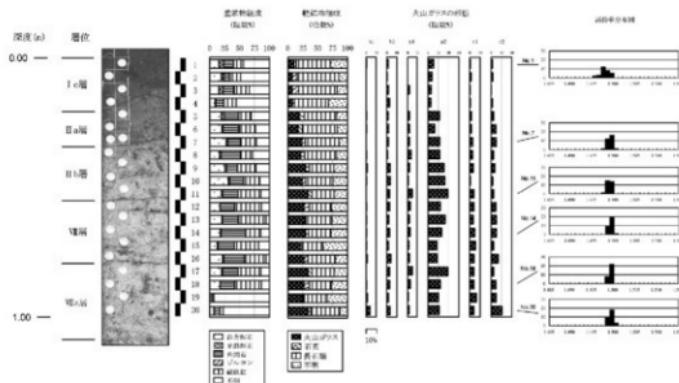
## 5 おわりに

新屋大和田遺跡で採取した連続試料20点について鉱物組成および火山ガラスの屈折率測定を行った。

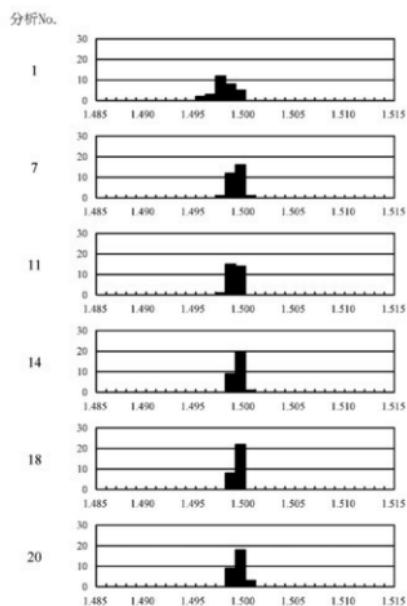
その結果、軽石型ガラスが、分析No. 6～No. 20において比較的多く含まれ、これら火山ガラスは、形態的特徴と屈折率測定結果から、浅間草津テフラ（As-K）の可能性が高い。ただし、降灰層準は特定できなかつた。

### 引用文献

- 小林義雄・立石雅昭・小松原琢 2002 三条地域の地質、地域地質研究報告（5万分の1地質図幅），98p, 産総研地質調査研究センター。
- 町田 洋・新井房夫 2003 新編火山灰アトラス, 336p, 東京大学出版会。
- 古環境研究所 2013 「高野遺跡」, 第V章自然科学分析, 三条市教育委員会, 21-25。
- 横山卓雄・権原 徹・山下 透 1986 溫度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定, 第四紀研究, 25, 21-30.

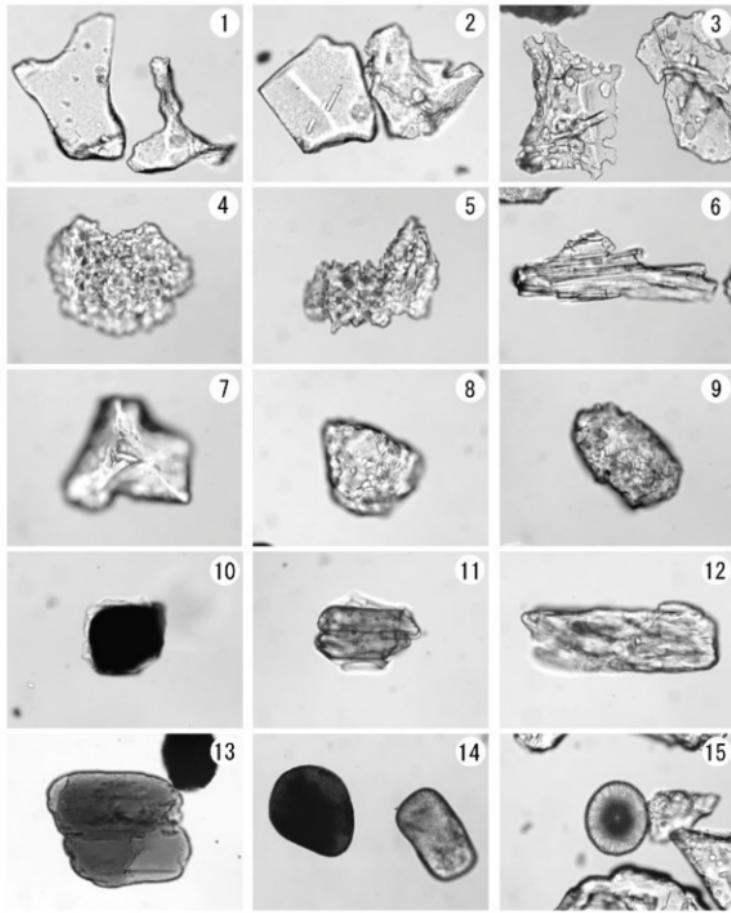


第9図 連続試料の重鉱物・軽鉱物組成、火山ガラスとその屈折率



範囲(range)	平均(mean)	個数
1.4952 - 1.4994	1.4978	30
1.4977 - 1.5001	1.4991	30
1.4979 - 1.4998	1.4990	30
1.4981 - 1.5000	1.4992	30
1.4981 - 1.4999	1.4992	30
1.4984 - 1.5002	1.4992	30

第10図 主な試料中の火山ガラスの屈折率測定結果



1. バブル型ガラス (左: 平板状、右: Y字状: No. 20)
2. バブル型ガラス (左右: Y字状: No. 20)
3. バブル型ガラス (左右: Y字状: No. 10)
4. 軽石型ガラス? (No. 11)
5. 軽石型ガラス? (No. 5)
6. 軽石型纖維状 (No. 3)
7. 急冷破碎型フレーク状 (No. 6)
8. 急冷破碎型塊状 (No. 20)
9. 急冷破碎型塊状 (No. 10)
10. 硅鉄鉱 (No. 10)
11. 斜方輝石 (No. 2)
12. 單斜輝石 (No. 18)
13. 角閃石 (No. 18)
14. 不明粒子 (No. 13)
15. 放散虫化石 (No. 7)

第11図 テフラ粒子等の偏光顕微鏡写真 (スケール: 50 μm)

## 第VII章　ま　と　め

### 1　遺　　物

今回の調査で発見された石器は、鎧状石器2点、打製石斧1点、不定形石器2点、剝片7点である。これらは1区北側拡張区と2区南側のI層で3点出土し、残り9点は1区と2区の間を通る農道部分などで表面採集された。平成20年度調査の報告では狩猟具と調理具が見られたが、今回の調査では加工工具が主体であった。鎧状石器2点は平坦剝離を多用しており、刃部の加工が入念な点で共通している。不定形石器2点は刃部の成形がいずれも入念でないが使用痕と考えられる。

今回報告の石器は、平成25年度の調査を含め旧石器時代の遺跡が確認されていないことや、過去の新屋大和田遺跡の調査等から縄文時代の石器である可能性が高い。ただし、詳細な時期については、共伴する土器がないこと、遺構出土でないことから不明である。

### 2　遺　　構

今回検出したピットは77基あるが、そのうち63基は1区と3区に分布しており、本来遺跡の中心と考えられる平坦部に設定した2区での検出数は極端に少ない。平面規模は長径25cm以下のものが45基、深さは15cm以内のものが約8割と小規模なもののが多かった。遺構埋土の堆積状況が柱痕状を呈するものが12基点在して認められた。これらは建物や柵などの構造物を構成していたと考えられるが、狭長な調査区の制限もあり、構造等を明らかにすることはできなかった。3区北側B40・41グリッド付近では地形が谷状を呈していた。この谷の北側では土坑やピットを10基検出しており、さらに北側に遺構が展開している可能性がある。

遺構内からは遺物が出土しなかったため、明確な時期を明らかにすることはできなかった。しかし、過去に表面採集された遺物から縄文時代と古代の遺構である可能性を指摘しておきたい。

### 3　遺　　跡

新屋大和田遺跡の時期については、三商考古班の精力的な踏査の結果、発見された遺跡であり、縄文時代の遺物と古代の遺物が表面採集されている。

三商考古班の資料中に縄文土器（第12図）があり小片であるが、寺崎裕助氏のご教示によれば半截竹管系の施文などの特徴を持つ土器（1・2・3・4）は文様から縄文時代中期前葉の土器であると考えられ、それ以外（5・6・7）についてはL Rの縄文が施されており、いずれも中期から後期前半までの時期で収まると考えられる〔寺崎2009〕。平成20年度の調査では縄文時代の遺物として土器は発見されていないが、石樵、磨石などの石器および剝片が表面採集されている。今回の調査資料も含め遺構出土品が無いため具体的な時期や遺跡の性格を決定することは出来ないが、縄文時代中期を中心とした時期に一定の活動があったことが想定される。付近では曲谷E遺跡で縄文時代中期前葉のまとまった資料が報告されてお

り、時期的につよい相関性が伺われる。また、4棟の竪穴建物の報告がなされているが、掘り込みは黒土中から掘込まれていると考えられており、検出した掘込みは浅く、遺構のプランは推定の部分もある[長澤ほか2001]。新屋大和田遺跡もピットしか検出されていないが、こうした曲谷E遺跡の遺構のあり方は非常に示唆的であり、今後、新屋大和田遺跡を評価する際に検討されるべき点である。

古代に属する遺物は三商考古班の表面採集資料では須恵器や土師器の甕の破片が数点ある。また、平成20年度の調査時の表面採集資料でも、9世紀代と考えられる須恵器の甕片があり、胎土は、春日氏の分類によるB群で、佐渡市（旧佐渡郡羽茂町）小泊窯跡群など佐渡市南西部の須恵器窯にみられる胎土である。

新屋大和田遺跡では、平成20年度の調査および今回の調査でピット群が散在する状況を確認したが、遺構からの出土遺物がなく、明確に時期を特定することはできなかった。これは、遺跡の中心が河岸段丘の平地部の中央部分にあり、平成20年度および今回の調査区がその東側の縁辺部にあたるためと考えられる。また、付近に洪水の影響を受けない同様の平坦地は見当たらないため、格好の立地条件を活かした土地利用が想起される。

高城城跡は明治期に小樽一蔵によって著された『嵐渓史』〔小樽1912〕によれば「高城の城趾は、森村大字院内と、本村大字新屋とに跨りある山城にして、曾て、長尾達江守景久の據りし所なり。本城の外に、二個の小城あり。新屋に面せるものを牛座と云い、院内に在るものを蛇尾と云ふ。牛座には、当時の用水溜なりとて、岩石に穿てる大水溜あり。…（以下省略）」とあり、『下田村史』〔下田村史編集委員会1971〕にも「高城のまわりに物見の小城があつて、新屋に面したもの牛座の城、院内に面したものを蛇尾の城と称していた」とあり、五十嵐川の水運を利用する森町側に入口があつたとされるが、新屋側からの行き来もあったことが想定される。新屋大和田遺跡の存在する段丘の北側、中浦の小字名に大和田がある。『角川日本地名大辞典15新潟県』によれば、旧荣町の大和田村の項での言及であるが大和田の字義について「水路が曲がりくねっていて水捌きのよくない湛水地をいう」という『新潟地名新考』を引用して、「大きな湛水を意味するのであろう」とされている〔竹内ほか1989〕。新屋大和田遺跡のすぐ脇を流れる鹿熊川は落合と中浦のあたりで大きく西流するので、大和田の由来は鹿熊川が屈曲するためにつけられた字名とも考えられる。

以上を勘案すると、新屋大和田遺跡は河岸段丘上の平地で鹿熊川の水運を利用した拠点の一つとして営まれた集落で、複数の時代に渡って利用された複合遺跡と評価することができる。



第12図 三条商業高等学校社会科クラブ考古班採集による新屋大和田遺跡の縄文土器

## 要 約

- 1 新屋大和田遺跡は、新潟県三条市新屋字平林1347-4から1358-2に所在する。遺跡は鹿熊川右岸の河岸段丘上に立地し、現況は畑地で、標高78～72mである。
- 2 発掘調査は主要地方道長岡棚尾巻線【新屋拡幅】地方特定道路整備事業に伴い、平成25年9月9日～10月25日にかけて実施した。調査面積は1,677m<sup>2</sup>である。
- 3 調査の結果、縄文時代、古代と考えられる遺構・遺物を検出した。
- 4 遺構は、土坑1基、ピット77基を検出した。ピットは建物や柵などの建造物を構成していたと思われるが、調査中や図面上においても構造等を明らかにできなかつた。
- 5 遺物は石器のみで、鏃状石器・打製石斧・不定形石器・剣片である。これまでの調査や形態等から縄文時代の所産と考えられる。
- 6 新屋大和田遺跡は、縄文時代と古代に営まれた集落と考えられ、今回の調査地は段丘上に広がる集落の東縁辺部である。

## 引用・参考文献

- 荒川隆史<sup>(注)</sup> 2004 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡』新潟県教育委員会・財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 石坂圭介 1999 「第2章 繩文時代 第3節 集落と住居 第1項 遺跡の立地と集落」『新潟県の考古学』高志書院
- 植木 宏<sup>(注)</sup> 1987 「高城」『新潟県中世城館跡分布調査報告書』新潟県教育委員会
- 小柳一義 1912 『風説史』瑞柳書院
- 家田順一郎<sup>(注)</sup> 1983 『下田村文化財調査報告書第30号 藤平遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 家田順一郎 1986 『下田村文化財調査報告書第20号 藤平遺跡発掘調査報告書Ⅱ』下田村教育委員会
- 家田順一郎 1987 『下田村文化財調査報告書第22号 印苗原遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 家田順一郎<sup>(注)</sup> 1990 『下田村文化財調査報告書第29号 長野遺跡発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 春日真実 1999 「第4章 古代 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2005 「越後ににおける奈良・平安時代土器編年の対応関係について」『新潟考古』16号 新潟県考古学会
- 勝山百合 2004 『下田村文化財調査報告書第34集 成就院駕籠跡』下田村教育委員会
- 勝山百合 2006 『三条市文化財調査報告第18集 父ノ原遺跡』下田村教育委員会
- 勝山百合<sup>(注)</sup> 2013a 『五百川遺跡発掘調査報告書』三条市教育委員会
- 勝山百合<sup>(注)</sup> 2013b 『高野遺跡発掘調査報告書』三条市教育委員会
- 金子拓男 1973 『下田村文化財報告第1輯 五十嵐小文治館発掘調査報告書』下田村教育委員会
- 金子拓男・千葉英一 1977 『下田村文化財調査報告第7号 県営前谷園場整備地内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 南中赤坂遺跡 南中五輪峠遺跡 飯田五輪峠遺跡』下田村教育委員会
- 金子正典・田村浩司 1994 『三条市文化財調査報告第7号 綾ノ前・菖蒲沢遺跡』三条市
- 小林 存 2004 『新潟地名新考』新潟日報事業社
- 三条市史編集委員会 1983 『三条市史』上巻 三条市
- 下田村史編集委員会 1971 『下田村史』下田村史刊行委員会
- 鈴木俊成 1999 「第2章 繩文時代 第5節道具と技術 第2項早期から晩期までの石器組成」『新潟県の考古学』高志書院
- 鈴木俊成・高橋保雄<sup>(注)</sup> 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第72集 清水上遺跡Ⅱ(本文編)』新潟県教育委員会・財团法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高野晶文 2012 『三条市埋蔵文化財調査報告書 新屋大和田遺跡』三条市教育委員会
- 高野晶文・北村和徳 2013 『三条市埋蔵文化財調査報告書 新堀遺跡』三条市教育委員会
- 高野晶文・長沼吉嗣 2012 『三条市埋蔵文化財調査報告書 村下遺跡』三条市教育委員会
- 竹内理三<sup>(注)</sup> 1989 『角川日本地名大辞典15新潟県』
- 田村浩司 1990 「南蒲原郡下田村飯田三千坊伝承地について」『新潟考古』第1号 新潟県考古学会
- 寺崎裕助 2009 「新潟県における新崎式土器」『新潟県の考古学Ⅱ』新潟県考古学会
- 長澤廣生<sup>(注)</sup> 2001 『下田村文化財調査報告書第33号 曲谷E遺跡調査報告書』下田村教育委員会
- 中島栄一 1977 『下田村文化財報告第3輯 下山遺跡』下田村教育委員会
- 中村孝三郎・中島栄一 1975 『下田村文化財調査報告書第2輯 芹沢・八幡平遺跡緊急調査報告書』下田村教育委員会
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1971 『五十嵐川流域における先史遺跡』調査報告第4冊 新潟県立三条商業高等学校
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1980 『新屋大和田遺跡』『五十嵐川流域における先史遺跡』VOL. 2 調査報告第6冊 新潟県立三条商業高等学校
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1981 『五十嵐川流域における先史遺跡』VOL. 3 調査報告第7冊 新潟県立三条商業高等学校
- 新潟県立三条商業高等学校社会科クラブ考古班 1982 『跡を追って』三千坊調査報告書 VOL. 1 新潟県立三条商業高等学校農林水産省技術会議事務局・財团法人日本色彩研究所 2006 『新版標準土器色帳』日本色研事業株式会社
- 丸山数政 1987 『高城の流れ』丸山数政

造構観察表(1)

造構番号	調査区	位置	形状		規格 (m)			底面標高 (m)	備考
			平面形	断面形	長径	短径	深さ		
P01	3IC北側	B42-8	楕円形	台形状	0.58	0.36	0.05	73.06	
P02	3IC北側	A42-23	楕円形	台形状	0.37	0.21	0.21	72.61	
P03	3IC北側	B41-5	円形	弧状	0.17	0.16	0.08	72.48	
P04	3IC北側	B41-5	楕円形	台形状	0.33	0.26	0.06	72.32	
P05	3IC北側	B41-9	円形	弧状	0.22	0.22	0.05	72.37	
S06	3IC北側	B42-2+3	楕丸長方形	台形状	1.02	0.75	0.12	72.74	
P07	3IC北側	B41-9	円形	台形状	0.25	0.23	0.14	72.65	
P08	3IC北側	B41-4+5	円形	台形状	0.30	0.27	0.08	72.37	
P09	3IC北側	B41-5	楕円形	台形状	0.29	0.22	0.06	72.55	
P10	3IC北側	A42-24 B42-4	円形	台形状	0.40	0.35	0.10	72.96	
P11	3IC北側	B40-7	楕円形	台形状	0.31	0.24	0.14	72.89	
P12	3IC北側	B39-12	楕円形	台形状	0.28	0.19	0.10	73.06	
P13	3IC北側	B39-17	楕円形	台形状	0.23	0.17	0.12	73.05	
P14	3IC北側	B39-16	楕円形	台形状	0.32	0.24	0.11	72.82	
P15	3IC北側	B38-24	円形	台形状	0.25	0.23	0.09	72.79	
P16	3IC北側	B38-17	円形	漏斗状	0.29	0.28	0.14	72.84	
P17	3IC北側	B38-24	円形	弧状	0.21	0.18	0.08	72.81	
P18	3IC北側	C37-5	円形	台形状	0.21	0.21	0.05	72.79	
P19	3IC北側	C37-5	円形	台形状	0.21	0.19	0.07	72.83	
P20	3IC北側	E38-18	円形	台形状	0.30	0.25	0.19	72.63	
P21	3IC南側	C37-7	楕円形	半円状	0.27	0.17	0.07	72.92	
P22	3IC南側	C37-2	円形	台形状	0.20	0.18	0.09	72.95	
P23	3IC南側	C37-7	楕円形	U字状	0.23	0.17	0.17	72.84	
P24	3IC北側	E37-23	円形	漏斗状	0.28	0.25	0.13	72.88	
P25	3IC南側	C37-1	楕円形	弧状	0.26	0.20	0.06	72.93	
P26	3IC南側	E36-25	円形	弧状	0.19	0.19	0.07	72.87	
P27	3IC南側	C36-4	円形	弧状	0.23	0.24	0.13	72.95	
P28	3IC南側	C36-6	円形	台形状	0.30	0.18	0.13	72.97	
P29	3IC南側	C36-7+8	円形	弧状	0.20	0.19	0.06	72.98	
P30	3IC南側	C35-9	楕円形	弧状	0.26	0.22	0.13	72.91	
P31	3IC南側	C36-7	円形	台形状	0.18	0.18	0.11	72.94	
P32	3IC南側	C35-14	円形	半円状	0.16	0.13	0.09	72.99	
P33	3IC南側	C32-25	円形	弧状	0.28	0.26	0.10	73.08	
P34	3IC南側	C33-21	楕円形	漏斗状	0.38	0.28	0.17	72.99	
P35	2IC北側	E30-3+4	楕円形	台形状	0.19	0.15	0.13	73.32	
P36	2IC北側	E30-3	楕丸長方形	台形状	0.23	0.21	0.10	73.38	
P37	2IC北側	E28-21	円形	台形状	0.19	0.17	0.12	74.06	
P38	2IC北側	E27-29	楕円形	U字状	0.23	0.16	0.15	74.09	
P39	2IC北側	E27-29	楕円形	弧状	0.21	0.19	0.14	74.13	

## 遺構観察表(2)

遺構観察表(2)

遺構番号	調査区	位置	形状		規模(m)			底面標高(m)	備考
			平面形	断面形	長径	短径	深さ		
F40	IIC北側	E27-19	楕円形	V字状	0.38	0.30	0.16	74.11	
F41	IIC南側	J3-22	(楕円形)	台形状	(0.36)	(0.28)	0.29	77.97	
F42	IIC南側	J3-22	不整円形	台形状	0.22	0.21	0.13	77.97	
F43	IIC南側	J3-23	楕円形	台形状	0.30	0.22	0.09	77.99	
F44	IIC南側	J3-24	不整長楕円形	台形状	0.40	0.24	0.07	78.00	
F45	IIC南側	J4-21	不整円形	台形状	0.19	0.18	0.14	77.95	
F46	IIC南側	J5-18	楕円形	台形状	0.23	0.18	0.08	77.93	
F47	IIC南側	J7-17	円形	弧状	(0.25)	0.26	0.09	78.25	
F48	IIC南側	J7-18	円形	台形状	0.17	0.17	0.09	78.34	
F49	IIC南側	J7-19	楕円形	弧状	0.28	0.24	0.09	78.20	
F50	IIC南側	J3-23	円形	台形状	0.21	0.18	0.11	77.98	
F51	IIC南側	J7-19	円形	台形状	0.25	0.24	0.12	78.17	
F52	IIC南側	J7-19	円形	弧状	0.28	0.26	0.15	78.17	
F53	IIC南側	J8-12	楕円形	半円状	0.17	0.15	0.08	77.98	
F54	IIC南側	J8-19	円形	半円状	0.23	0.22	0.11	77.87	
F55	IIC南側	J9-12	(楕円形)	弧状	(0.20)	(0.20)	0.09	77.38	
F56	IIC南側	J8-15	不整長方形	弧状	0.34	0.25	0.09	77.74	
F57	IIC南側	J10-7	円形	U字状	0.17	0.17	0.19	76.82	
F58	IIC北側	I12-19	楕円形	台形状	0.38	0.25	0.12	76.26	
F59	IIC北側	I12-19	円形	弧状	0.25	0.21	0.10	76.29	
F60	IIC北側	I15-19	不整円形	V字状	0.27	0.25	0.18	75.46	
F61	IIC北側	I15-19	円形	台形状	0.29	0.27	0.14	75.54	
F62	IIC北側	I15-3	円形	V字状	0.23	0.22	0.17	75.65	
F63	IIC北側	I15-6	楕円形	V字状	0.21	0.17	0.17	75.77	
F64	IIC北側	I17-4	円形	U字状	0.27	0.25	0.22	75.21	
F65	IIC北側	I15-25	円形	U字状	0.20	0.18	0.18	75.47	
F66	IIC北側	I06-16	円形	U字状	0.19	0.18	0.18	75.44	
F67	IIC北側	I15-25	円形	U字状	0.18	0.16	0.22	75.48	
F68	IIC北側	G19-13	不整長楕円形	弧状	0.35	0.23	0.11	75.25	
F69	IIC北側	G18-25	円形	漏斗状	0.25	0.22	0.15	75.31	
F70	IIC南側	G20-4	楕円形	半円状	0.27	0.23	0.14	75.97	
F71	IIC南側	G20-5	楕円形	半円状	0.21	0.18	0.10	75.91	
F72	IIC南側	F22-22	円形	半円状	0.23	0.21	0.10	74.90	
F73	IIC南側	E26-5	円形	台形状	0.18	0.17	0.11	74.36	
F74	IIC南側	F22-13	円形	半円状	0.22	0.21	0.18	74.75	
F75	IIC南側	F22-7	円形	台形状	0.24	0.24	0.09	74.82	
F76	IIC南側	F22-4	円形	弧状	0.17	0.15	0.08	74.75	
F77	IIC南側	G21-7	楕円形	半円状	0.20	0.16	0.11	75.64	
F78	IIC南側	J7-13		弧状			0.11		

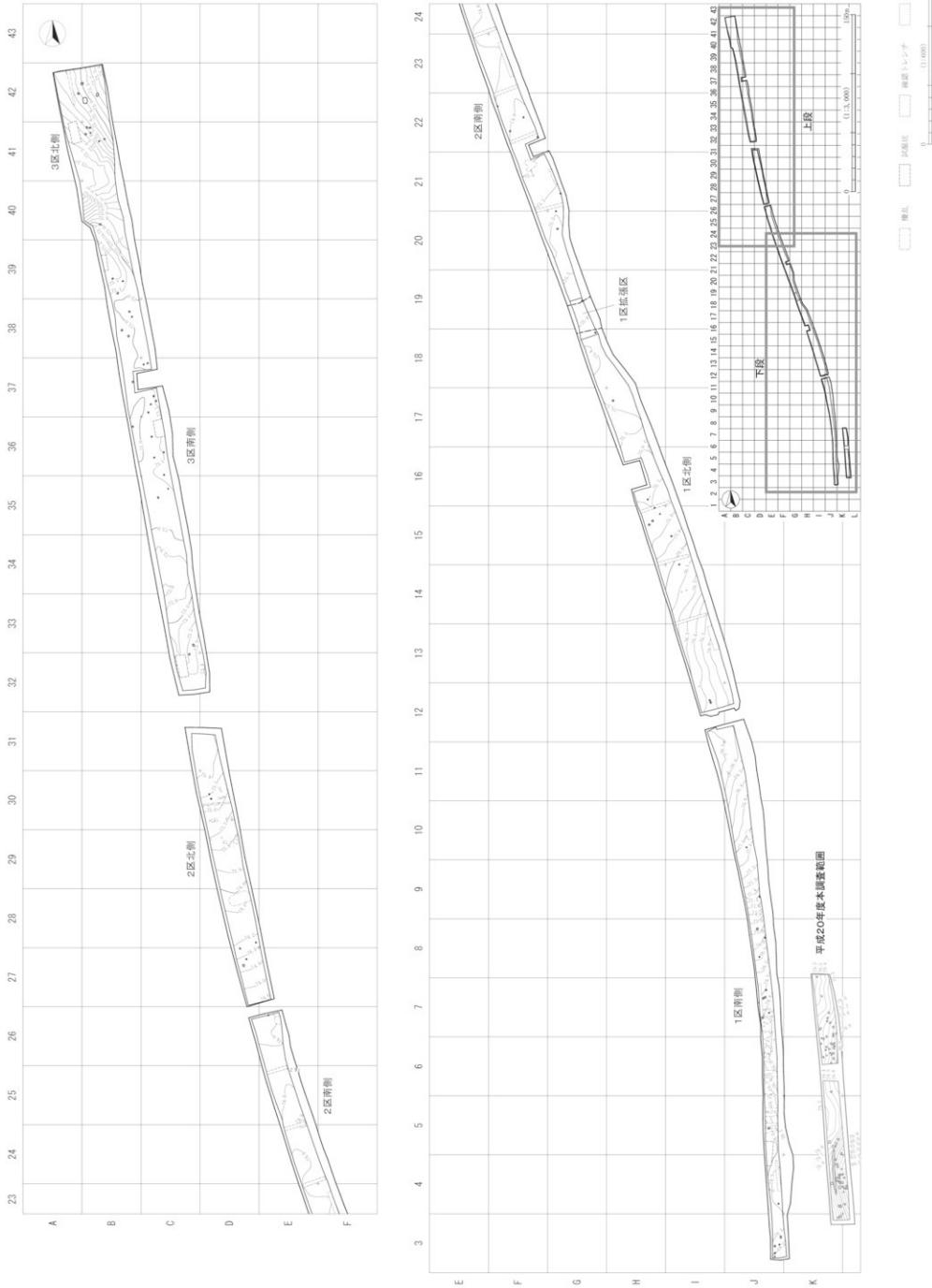
石器類別表

番号 番号	類別 番号	出土位置 番号	記述		分類	石片	表面	(消費・使用)	使用状況	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	備考
			記述	記述										
1	1	表層	圓底6	直面	板状	板状	直面	直面・側面	直面	7.49	4.68	2.90	82.4	
2	2	表層	圓底6	直面	圓底	圓底	直面	直面・側面	直面	6.90	4.45	2.90	49.9	
3	3	G19 表上層	打製石片	直面	板状	板状	上半部	板状	板状	7.20	5.05	2.20	77.3	
4	4	表層	不規則6	直面	板状	板状	直面	直面・側面	直面	2.80	4.05	1.10	7.0	
5	5	表層	不規則6	直面	板状	板状	直面	直面・側面	直面	6.40	3.90	1.60	28.5	正面下面にターナー状の付着物。
6	6	25cm表上層	剥片	直面	直面	直面	上半部	板状	直面	6.22	4.96	1.60	34.0	下端に縫合跡。
7	7	表層	剥片	直面	直面	直面	直面	直面	直面	2.97	3.93	1.44	15.6	
8	8	表層	剥片	直面	直面	直面	直面	直面	直面	5.31	4.27	0.39	13.8	
9	9	表層	剥片	直面	直面	直面	直面	直面	直面	5.39	3.94	1.17	19.6	
10	10	表層	剥片	直面	直面	直面	上・下	板状	直面	2.50	3.19	0.62	6.4	
11	11	G19 表上層	剥片	直面	板状	直面	下	板状	直面	3.04	4.13	1.31	26.1	
12	12	表層	剥片	直面	直面	直面	直面	直面	直面	2.22	4.29	0.69	6.2	

各器種分類(日本水・海魚目-1996)による。

図 版

調査区全体図



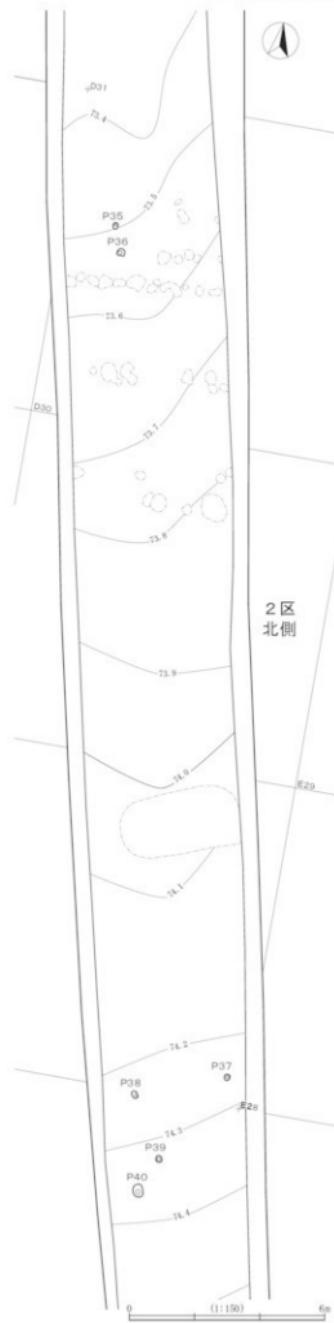
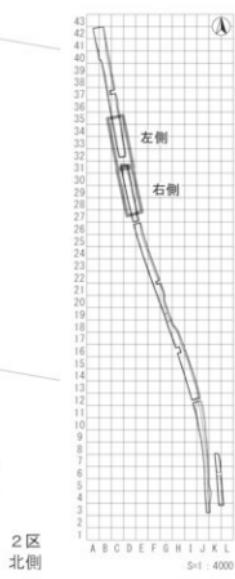
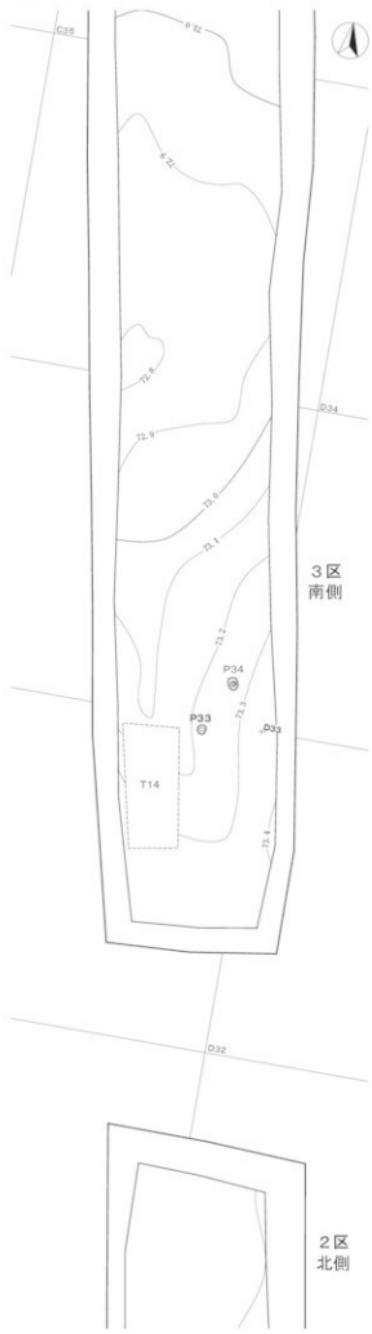
### 造構分割図（1）

圖版 2



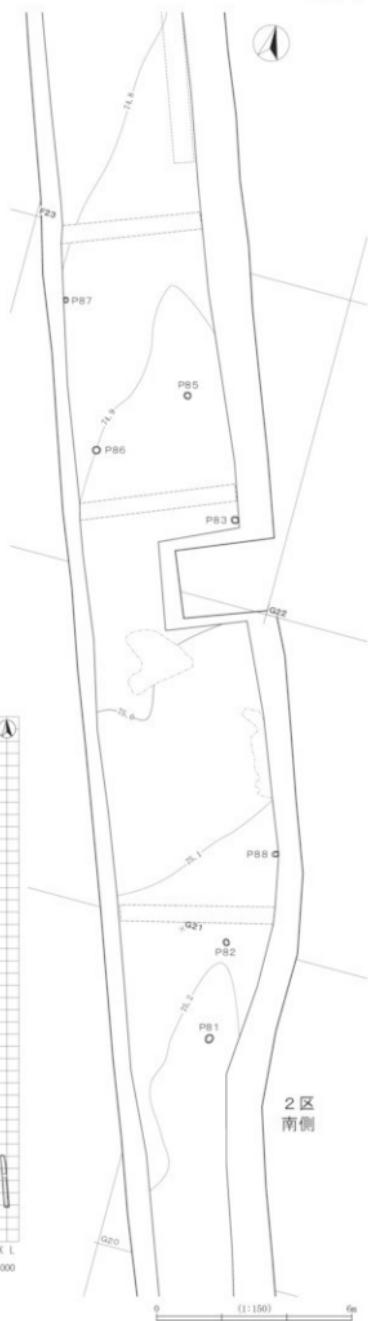
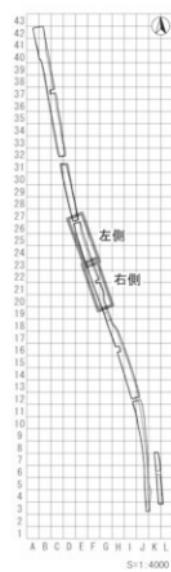
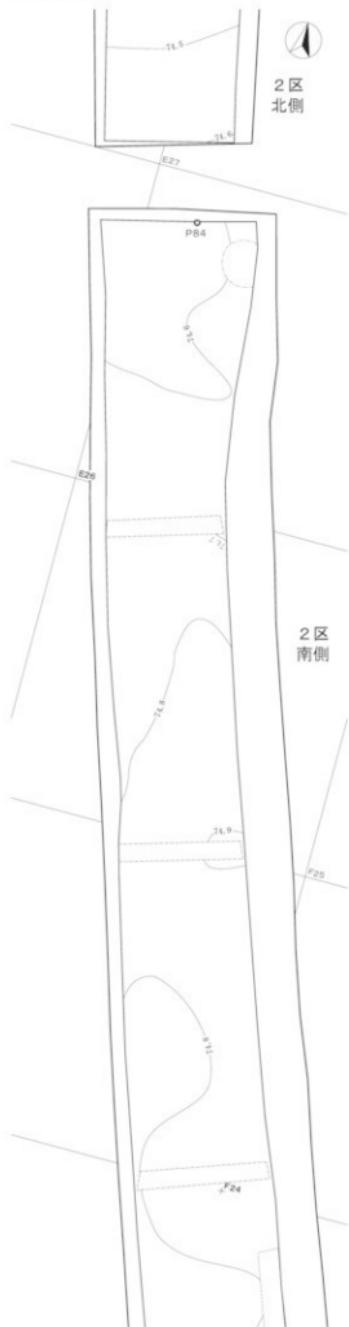
図版 3

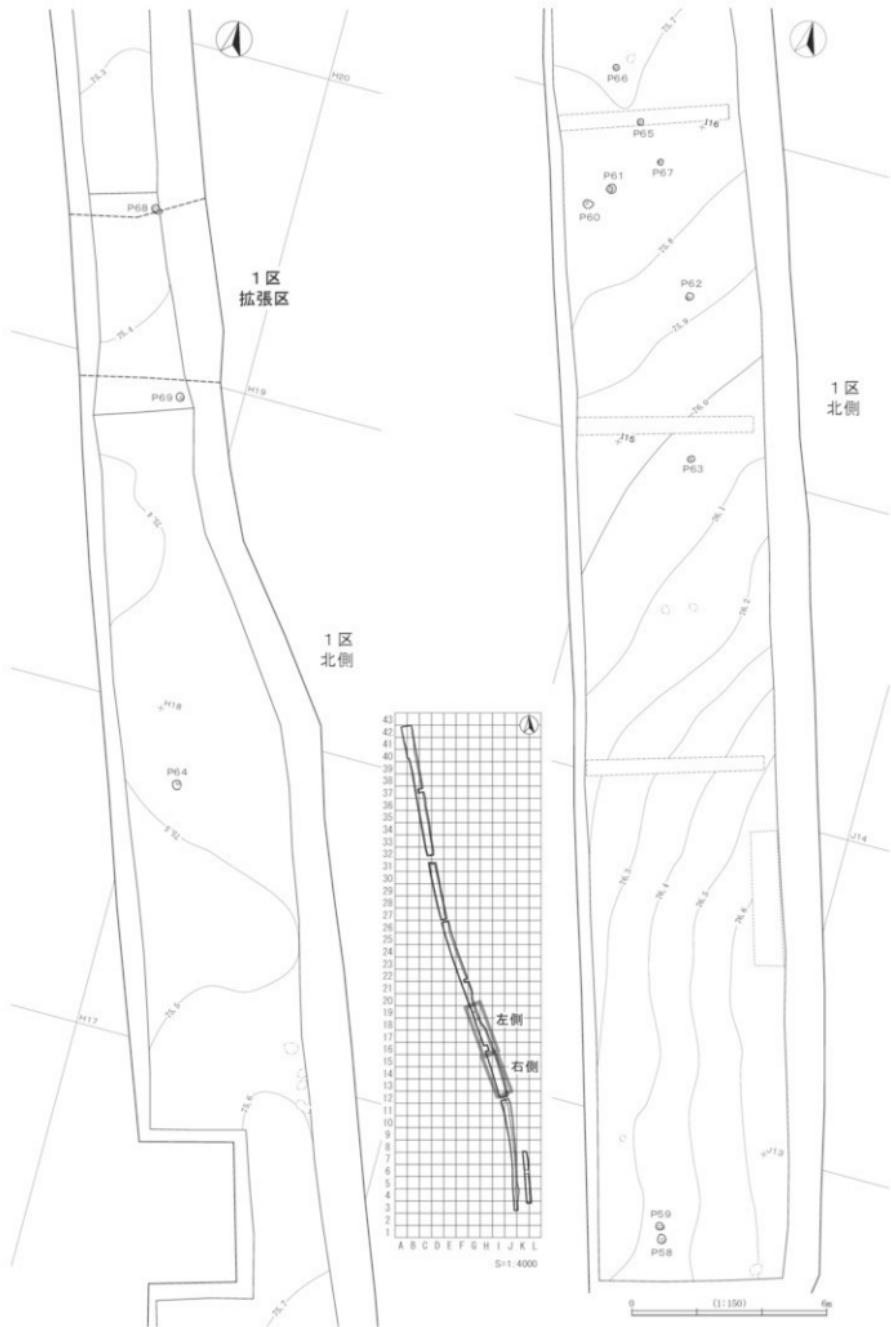
造構分割図 (2)



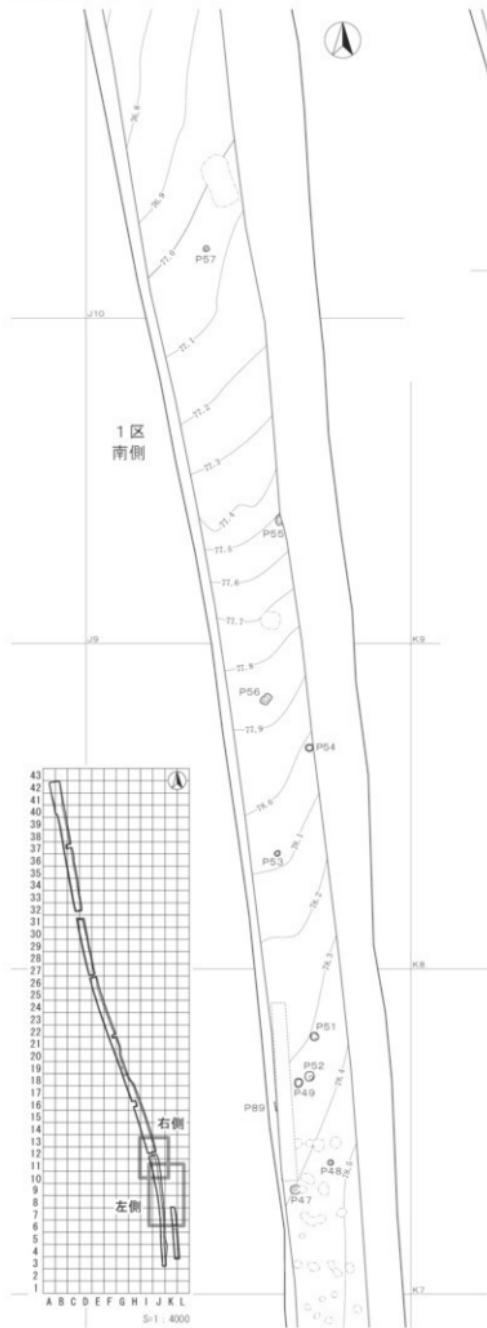
### 構造分割図 (3)

圖版 4

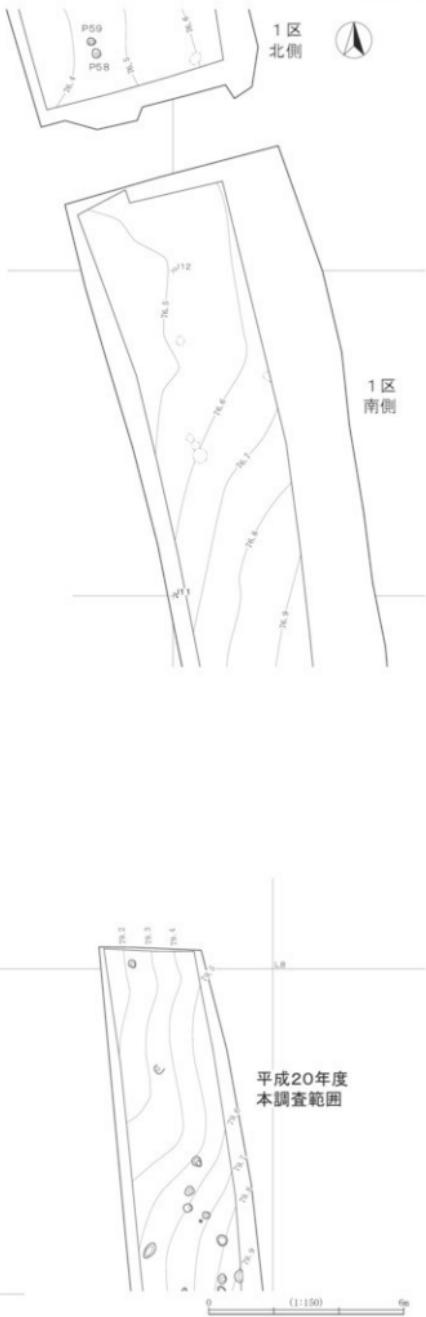




### 造構分割図 (5)



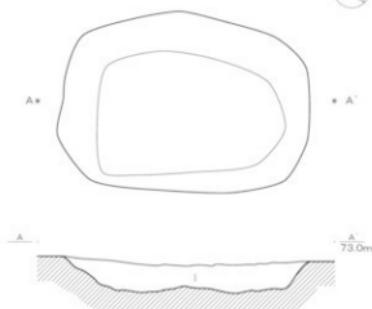
圖版 6





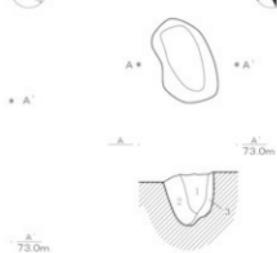
遺構別図 (1)

SK6

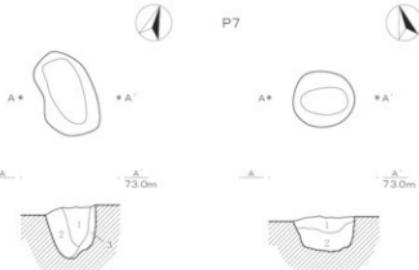


1 黒褐色粘質シルト (10R2/3)  
しまりやや弱い、粘性普通  
にぶい黄褐色シルト20%程度混在する。

P2



P7



1 黄褐色粘質シルト (10R2/3)  
しまりやや弱い、粘性普通  
にぶい黄褐色シルト20%程度混在する。

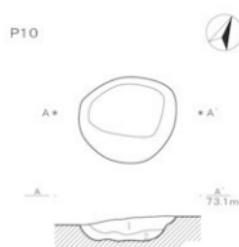
2 黄褐色シルト (10YR5/6)  
しまり普通、粘性普通  
10YR4/6の黒褐色粘土層混在する。

3 黄褐色シルト (10YR6/6)  
しまり普通、粘性普通  
10YR5/6にぶい黄褐色シルトが混在する。

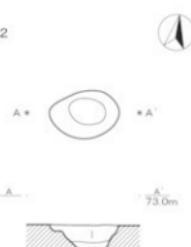
P8



P10



P12



1 黒褐色粘質シルト (10R2/3)  
しまりやや弱い、粘性普通  
にぶい黄褐色シルト20%程度混在する。

2 黄褐色シルト (10YR5/6)  
しまり普通、粘性普通  
10YR4/6の黒褐色粘土30%混在する。

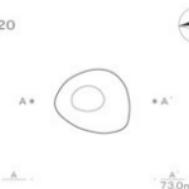
1 黒褐色粘質シルト (10R2/3)  
しまりやや弱い、粘性普通  
にぶい黄褐色シルト20%程度混在する。

2 黄褐色シルト (10YR5/6)  
しまり普通、粘性普通  
10YR4/6の黒褐色粘土30%混在する。

1 黑褐色砂質シルト (10R2/2)  
しまりやや弱い、粘性普通  
にぶい黄褐色シルト小粒状に含む。  
黄褐色砂質シルト混合。

2 黄褐色砂質シルト (10YR4/2)  
しまりやや弱い、粘性弱い  
黄褐色砂質50%程度含む。

P20



1 黑褐色砂質シルト (10R2/2)  
しまりやや弱い、粘性普通

P23



1 黑褐色砂質シルト (10YR2/2)  
しまりやや弱い、粘性普通  
淡褐色砂質シルト小粒ロック  
少量含む。

2 黑褐色細砂 (10YR3/3)  
しまり普通、粘性弱い

P24



1 黑褐色砂質シルト (10R2/2)  
しまりやや弱い、粘性普通  
淡褐色砂質シルト小粒ロック  
少量含む。

2 黑褐色細砂 (10YR3/3)  
しまりやや弱い、粘性弱い

P38



P39



P40



$\frac{A}{A'}$

74.3m



- 1 黒褐色砂質シルト (10TR2/3)  
しまり普通 粘性弱い
- 2 黑褐色砂質シルト (10VR3/4)  
しまり普通 粘性弱い

$A$  \*      \*  $A'$

$\frac{A}{A'}$

74.4m



- 1 黑褐色砂質シルト (10TR2/3)  
しまり普通 粘性弱い
- 2 黑褐色砂質シルト (10VR2/3)  
しまり普通 粘性弱い  
黄褐色シルトブロックが混在する。

$A$  \*      \*  $A'$

$\frac{A}{A'}$

74.5m



- 1 黑褐色砂質シルト (10TR2/3)  
しまり普通 粘性弱い
- 2 黄褐色シルトブロックが混在する。

P81



$\frac{A}{A'}$

75.3m



- 1 暗灰色シルト (10TR4/1)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m小縫まばらに多く含む。
- 2 暗褐色シルト (10VR4/3)  
しまり強い 粘性弱い  
1~5m小縫まばらに多く含む。

P82



$\frac{A}{A'}$

75.3m



- 1 黑褐色シルト (10TR2/3)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m黄褐色シルトが量含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト (10TR4/3)  
しまり強い 粘性弱い

P83



$\frac{A}{A'}$

75.2m



- 1 暗褐色シルト (10TR2/3)  
しまり普通 粘性普通  
1~2m黄褐色シルト、ブロック状  
に少く含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト (10TR4/3)  
しまり普通 粘性普通  
暗褐色シルト多く混入する。

P84



$\frac{A}{A'}$

74.6m



- 1 黒色シルト (10TR2/1)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m黄褐色シルト少く含む。
- 2 黑褐色シルト (10TR4/1)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m黄褐色シルト多く含む。

P85



$\frac{A}{A'}$

75.0m



- 1 黑褐色シルト (10TR2/1)  
しまり普通 粘性弱い
- 2 にぶい黄褐色シルト (10TR4/3)  
しまり強い 粘性普通

P86



$\frac{A}{A'}$

75.0m



- 1 暗灰色シルト (10TR4/1)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m小縫まばらに多く含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト (10TR4/3)  
しまり強い 粘性弱い  
1~2m小縫まばらに多く含む。

## 遺構別図 (3)

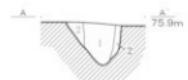
P59

 $A^*$  \*  $A'$ 

P60

 $A^*$  \*  $A'$ 

P62

 $A^*$  \*  $A'$ 

- 1 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

- 1 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

- 1 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

P65

 $A^*$  \*  $A'$ 

P67

 $A^*$  \*  $A'$ 

P69

 $A^*$  \*  $A'$ 

- 1 黒褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

- 1 黄褐色シルト (10TR3/3)  
しまり普通 粘性普通

- 1 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

P41



覆瓦

 $A^*$  \*  $A'$ 

P45

 $A^*$  \*  $A'$ 

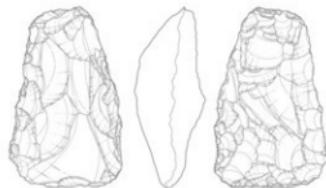
P52

 $A^*$  \*  $A'$ 

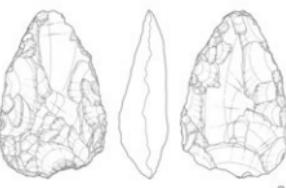
- 1 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

- 1 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。

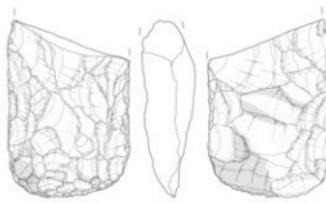
- 1 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い
- 2 黑褐色粘質シルト (10TR2/2)  
しまり普通 粘性強い  
黄褐色シルトとが混在する。



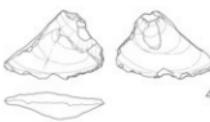
1



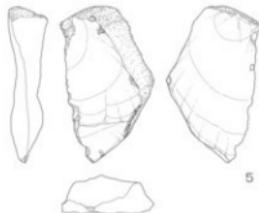
2



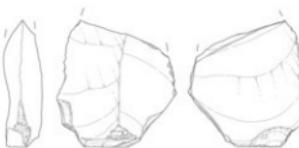
3



4



5



6



□ 使用痕 (2・3)

■ タール状付着物 (5)

0 (1:2) 10cm

粟ヶ岳



遺跡近景（北西上空から）

守門岳



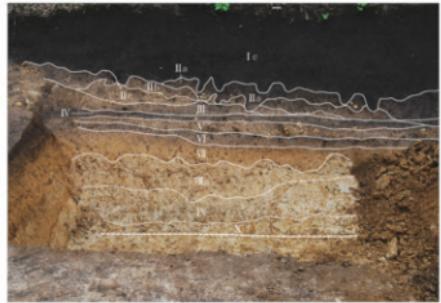
遺跡近景（北上空から）



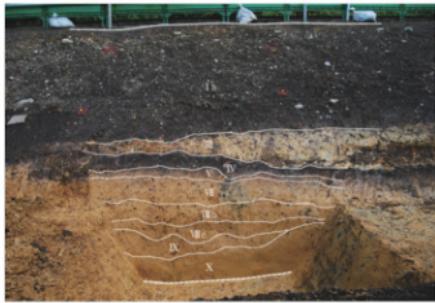
遺跡遠景（南上空から）



調査区全景（合成写真・上空から）



3区北側基本層序⑥（西から）



1区南側基本層序①（西から）



調査前状況（西から）



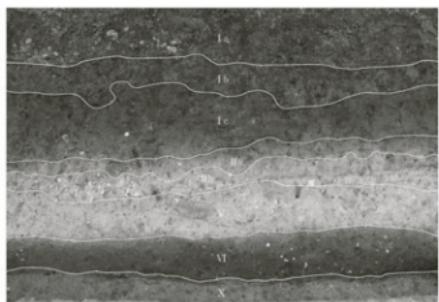
調査前状況（北から）



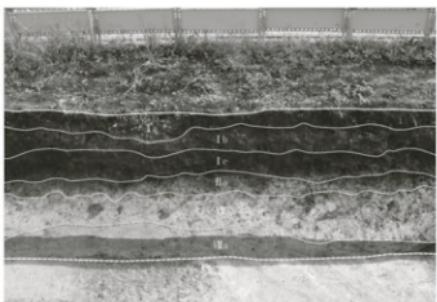
段丘上の新屋大和田遺跡と鹿熊川（東上空から）



調査区から鹿熊川上流方向を望む（北から）



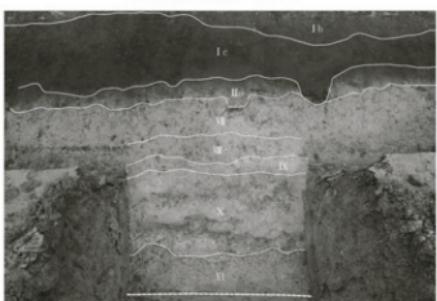
3区南側基本層序⑤（西から）



2区北側基本層序④（西から）



2区南側基本層序③（西から）



1区北側基本層序②（西から）



3区北側調査区全景（西上空から）



3区南側調査区全景（西上空から）



2区北側調査区全景（東上空から）



2区南側調査区全景（東上空から）



1区北側調査区全景（東上空から）



1区南側調査区全景（東上空から）



3区北側完掘状況（北から）



3区北側完掘状況（南東から）

## 遺構完掘状況



3区南側完掘状況（北東から）



2区北側完掘状況（北東から）



2区南側南北部完掘状況（南東から）



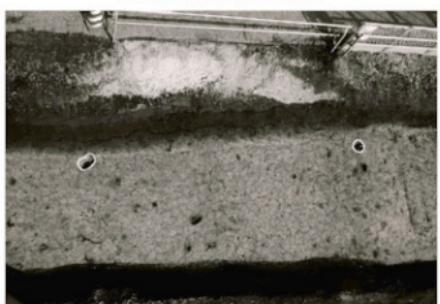
1区南側北半部完掘状況（南東から）



1区南側南北部完掘状況（北東から）



1区北側南半部完掘状況（北東から）



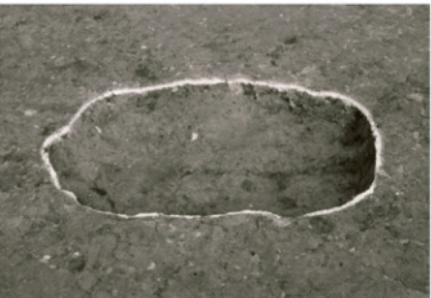
1区拡張部完掘状況（西から）



1区拡張部完掘状況（南東から）



SK6 断面 (西から)



SK6 完掘状況 (西から)



P7 断面 (南から)



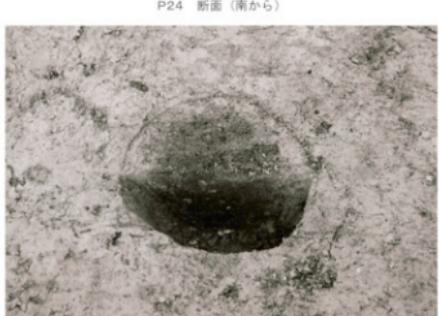
P12 断面 (南から)



P24 断面 (南から)



P39 断面 (南から)



P82 断面 (南から)



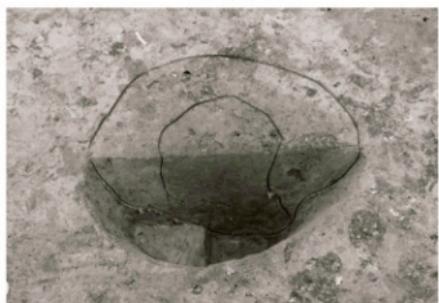
P83 断面 (南から)



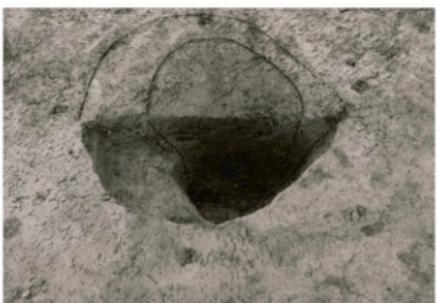
P60 断面（南から）



P62 断面（西から）



P52 断面（南から）



P69 断面（南から）



1区南側壁層検出状況（南西から）



3区北側壁層検出状況（南から）



1区北側作業風景（南東から）



1区北側作業風景（南東から）



1



2



3



5



4



6

すべて [1:2]

## 報告書抄録

ふりがな	あらやおおわだいせき に						
書名	新屋大和田遺跡II						
副書名	主要地方道長岡柳尾巻線【新屋拵幅】地方特定道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	三条市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号							
編著者名	高野晶文 繩井佳浩 濱口泰孝						
編集機関	三条市市民部生涯学習課						
所在地	〒955-0072 新潟県三条市元町13番1号 TEL 0256 (47) 0048						
発行年月日	西暦2015(平成27)年3月23日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'\"	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
新屋大和田遺跡	新潟県三条市 新屋字平林 1347-4から 1358-2	15204	243	37度 34分 2秒	139度 5分 5秒	20130909～ 20131025	主要地方道 長岡柳尾巻線 【新屋拵幅】 地方特定道路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
新屋大和田遺跡	集落	縄文 古代	土坑(1基) ビット(77基)	鏡状石器、打製石斧、不定形石器、 剣片			鹿島川に面する河岸段丘上に営まれた縄文時代・古代の集落の縁辺部。

### 新屋大和田遺跡II

主要地方道長岡柳尾巻線【新屋拵幅】地方特定道路整備事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成27年3月23日印刷 発行 三条市教育委員会

編集 三条市市民部生涯学習課  
〒955-0072 新潟県三条市元町13番1号  
電話 0256 (47) 0048

印刷 株式会社 明間印刷所  
〒955-0803 新潟県三条市同上丁目26番39号